
戦うコックさんの弟子ケンイチ

W a i

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦う「ツクさん」の弟子ケンイチ

【Zコード】

Z8788S

【作者名】

Wai

【あらすじ】

少年は幼い頃、心に深い傷を負い、塞ぎ混んでいた。だが、少年は一人の男に出会い、武術を学んだ。

少年は一つの夢と将来の目標を見つけ、走り出した。

そして、高校に入学して1ヶ月が過ぎた頃、まるで風を切る羽のような少女に出会い……

2人の運命が交差する時、物語は始まる。

BATTLE1（前書き）

どうも、W.a.iです。小説三作目で「」を書きます。
私の好きな漫画第一位の一次創作です。
主人公改造物ですが、楽しんでいただけた幸いです。
それではどうぞ！

BATTLE1

季節は春。暖かい陽射しが入学したての学生たちを出迎える、そんな季節。

「ハア、ハア、ハア……」

一人の少年が走っていた。

「まざい……また遅刻だ。はやくも遅刻魔の異名をとってしまう……！」

黒い学生服、右肩にショルダーバッグ。日本人特有の黒髪黒眼、左目の下に絆創膏。

「なんで今日も田代まし時計が鳴らないんだよ！」

そして、右の首もとには太陰太極図のバッジ。

少年の名は、白浜兼一。高校一年生。

「急げ、急げえ……ん?なんだあれ?」

急ブレーキし、地面に落ちてるピンクのハンカチを拾う。少し先に金髪で三つ編みの女子高生。

「あの子のかな……？」

金髪の女子高生に追い付き、話しかける。

「これ落とし……うおー。」

肩を叩いたと右手を伸ばした瞬間、首に女子高生の左腕が伸び、後ろ足に衝撃。バランスを崩し、体が後ろに倒れる。

「……ふつー。」

咄嗟に腹に力をいれ、足を丸めて勢いのまま後方宙返り。無事に着地。

「……100点……じゃない！いきなり何すんの！？ボクを殺す気か！？」

兼一はいきなり自分を投げた女子高生に怒鳴り付けた。

「あ、ああーーー！」、「じめんなさい、つい反射的に！…」

女子高生は振り向き、兼一に謝る。

金髪を三つ編みにして、二つの髪留めをつけ、眼鏡をかけた少女。

「す、すいませんですわー！」

名を風林寺美羽。高校一年生。

「で、でも、いきなり背後をとられたら、普通、投げ飛ばしません？」

「殺し屋かー？」

両方の人指し指をくつつけ、もじもじとしながらあり得ないこと
を言ひ美羽に対してもつともむ兼一。

「つて、うわーもつこんな時間だ！？君も急がないと遅刻だよーー！」

兼一は左手の腕時計を見てからまた走り出しあとした。

「あ、そつだーこれ、君の？」

だが、兼一は手に持っていたハンカチを思いだし、美羽に手渡す。

「あ、は、はい」

「そつかーじゃ、そつこい」とドー。」

「あ……てへ、またやつてしまひましたわ」

走り出した兼一を見送り、頭に右手を軽く当て手を出す美羽。

「それにしても……の方、なにか武術をなさっていますわね。しかもかなりやつ手」

せつときはつて代わり、眼鏡の奥の瞳が不思議な輝きを見せる。

「せつじえればあのバッジ、あの時のと同じものですね……ま、偶然ですわね」

美羽の田の色が元に戻り、歩き出した。

「……あら？ これは……」

美羽は落ちていた物を拾つた。黒い革ひもに、銀色の十字架の装飾が施された口ケツトペンドント。

「さつきの方の落とし物ですわね」

前を見ると遠くに見える兼一。追い付かせうには無い。

「会つたときにお礼と一緒に返すことにしてしましよう」

美羽はペンダントを制服のポケットに入れ、転校先の学校にむかつた。

この出会いは、偶然であり、必然。出会いづきして出会つた2人。

「やばいやばいやばい！！」

一人は幼い頃に深い傷を負いながらも夢を追い続ける少年。

「ふふつ、今度こそお友達ができるといですわね～」

もう一人は幼い頃から武術の世界に入り、普通とは違う生活をしてきた少女。

2人の運命が交差し、物語は始まる。

BATTLE 2（前書き）

連続投稿！いつまで続くかな……？

BATTLE 2

「はあ、はあ、はあ、まいつた……5分の遅刻だ……」

ようやく学校に着いた兼一。だが、間に合わず5分の遅刻し、教室の扉の前に立っていた。

「……だが、どつかの偉い人はこいつ言った。待つ身と待たされる身、どつちが辛いかと……」

兼一はどこか説得力に欠ける言葉を言い、ガツツポーズをした。いわゆる、開き直りである。

「そうだ、ボクだって遅刻したくてした訳じゃないし! いつそ堂々と入ろう!」

開き直った兼一は、堂々と教室の扉を開けた。

「おはよう! やこま~……うおつ! -」

元気よく挨拶をし、教室に入ろうとした瞬間、顔めがけて飛んでくる物体。

「ま、マト○ックス避け! -」

飛んでくる物体を、少々著作権的にマズイので伏せ字を使った上体を後ろに反らす避け方で躱す。

「あ、焦った……」

眼前を通り過ぎた物体は黒板消し。目標を外した黒板消しは、鈍い音を立てて壁にぶつかる。

「てか、明らかに当たつたらヤバい音が鳴つたよ……」

「ちつ……躲しあつたか」

「今、舌打ちした！ 絶対舌打ちした！！」

「やかましい！……どっちが辛いかは知らんが……どっちが悪いかはわかりきつとるー！」

舌打ちをし、説教を始めた人物。

眩しく光り輝く頭。眼鏡の奥には優しくも厳しいまさに教師の眼差し。その名を、安永福次郎（53）日本史教師。趣味は文化財鑑賞と、日本史教師ならでは（？）なお方だ。

……この説明、誰得？」

「……説明は済んだか？さつきから独り言をブツブツと……」

「しまつたー地の文を言つてしまつたよつだー」

兼一は、しまつた！という顔をし手を口に当てる。今のやり取りを見てクラスメイトはクスクスと笑いをこらえる。

「失礼しました安永日本史教諭！今日も廊下に立っています！」

「当然だー！」

敬礼のポーズを取り、安永先生から渡されたバケツを持ち、教室の外から出る。

「くそつ……ん？」

ふと教壇を見ると、金髪の少女が立っていた。朝に出合った女子高生だ。

「あれ？ なんで？」の娘たしかにボクより後から歩いて来たはず……なぜ先に？」

少女は明らかに兼一より後ろにいた。なのに、5分の遅刻をした兼一より早く学校にいた。

「あ、途中だつたな。彼女がこのクラスに転校してきた、風林寺美羽君だ！」

「風林寺……美羽」

金髪の少女の名は、風林寺美羽……と言ひついしい。

「といづか……転校生だつたんだ」

「……おい、白浜……わっさと廊下に……」

気付くと安永先生の頭にピキリと怒りマークが浮かび上がり、体からオーラを発していた。

「あ、氣！？ 氣ですか亀〇人さん！」

「出なんかあああーあと誰が亀仙〇だああー！」

「「はあつーす、すんませーんー？」

安永先生はチョークを3本投げつけながらシッ ハハ、兼一はそれを躊躇しながら教室に出る。

「まつたぐ……あ～すまんすまん風林寺君。大丈夫だつたかね？」

「はい」

あの時、美羽の頭の上を通過したチョーク。咄嗟に頭を下げ躊躇した為、被害を受けずにすんだようだ。

「高校生活が始まつてまだ1ヶ月といつ時期だが……みんな仲良くなれるんだぞ！」

思わず耳を傾ける兼一。ハイイや、ウース等の返事が聞こえる。

「松竹林高校から来ました、風林寺美羽です。よろしくお願ひしますですわ」

教室から美羽の自己紹介をしてくる声がする。

「松竹林高校？あの名門の？なんでもうちの高校に来たんだ？」

名門からこの不良が多い高校に……兼一はその事に疑問を覚える。

「これで朝のホームルームを終わる。田直一。」

「きつーつ、れーい」

「あ、やつとか……」

ホームルームが終わり、ガヤガヤと教室が騒がしくなった。教室の扉が開き、安永先生が現れる。

「白浜、次からは気を付けろよ。バイトが忙しいのは分かるが、それで勉学に支障が出るのは頂けないからな」

「は、はい」

呆れた目をしながら説教をする安永先生に対し、苦笑いをしながら答える。

「ふむ、よひしい。教室に戻りなさい」

「了解で～す」

入室の許可を得たのでそそくさと教室に入る兼一。

「さつきのやうどり最高だつたぜ白浜ー」

「○仙人はねえわーあれはウケたわ」

入った瞬間、クラスメイトの男から声をかけられる。さつきのやうどりが面白かったようだ。

「はははっ、まあね」

適当に応対し、自分の席に座る。ふと、美羽の方を見る兼一。

「さすがは転校生。囮まれてるなあ」

転校生の特権というか、役目というか、女子や男子に囮まれて質問されてる美羽。

ワタワタと戸惑いながらだが、丁寧に1人1人の質問に答えていく。

(真面目だなあ……ま、ボクには関係無いけど)

兼一は欠伸をし、腕を枕にし、顔を伏せる。そして、そのまま眠りに入った。

放課後

チャイムが学校中に鳴り響き、放課後を告げる。

「……ん、もう放課後か……昼休み以外ほとんど寝てしまつた

田を擦り、両手を挙げて背伸びをすると背骨が鳴った。

「んっ、ふううう……さて、帰るか

ショルダーバッグを肩にかけ、教室を出る。

「け～んい～ちく～ん」

「うわあっーう、宇宙人！？」

ぬつと現れたのはまさに宇宙人。耳は尖っていて鼻が長く、オカツバの宇宙人だ！

「までい！兼一！逃げるなあ！」

宇宙人の名は、新島春男。兼一とは中学から同じの男。強い不良に従い、弱い者にはいじめをする、まさに最低ど腐れゲス宇宙人だ！」

「地の文が出てるぞ……」

「これまたウツカリ。それで、何の用だ宇宙人

「おめ～んとこのクラスに、誰か転校してたらしいじゃね～か。どんな奴だ？」

「……女の子だよ、眼鏡をかけた」

「女あ～？へン、なんでえ、じゃああのクラスのパワーバランスに変更なしど……」

質問の答えに満足したのか、新島は手元の電子手帳を操作し始めた。

「あのさあ宇宙人、もう帰つていいか？」

「ん、ああ、もういいわ……というか兼一」

にやにやと不気味な笑みを浮かべる新島。その不気味さに少しひ

く兼一。

「何度も言つが、ボクはこの学校を支配するなんて事はしないからな。不良じゃあるまいし……」

「ちつーもつたいねえな……お前の実力ならすぐだってのに」

「会つたび言つなあ……ボクはそんなに強くないつて」

「はんつーじの口が言つか！ 知つてんだせ俺はよお……お前の実力も、お前のバイトも！」

これ見よがしに電子手帳を掲げる新島。そしてタッチペンを使い、電子手帳を操作する。

「白浜兼一……成績、中の下！ 運動神経、上の上！ ルックス中の上！ 体格、中の上！ 喧嘩指数、上の上の上！ ……」

電子手帳のデータを読み上げる新島。またかといった感じに聞く兼一。

「総合評価Aプラス！ ……ランク、カリスマ人間！ これを聞いてもそんなこと言つかあ！ ？」

「…………はあ」

ゼーゼーと息を荒げる新島に対し、兼一はため息をついた。

「それ、前にも聞いた。まつたく……よくそんな事を調べるよな」

「ふつ、情報は全てだ。情報無くして世の中生きられないんだ

「はー、はー……じや、帰るわ」

話しあは終わりだと帰りつつ踵を返す。

「待て待て……お前、バイトしてこいだろ」

慌てて呼び止める新島。だが兼一は既にせっせと歩き出す。

「そんなん誰でも知ってるぞお」

「違ひ、普通のバイトじゃない……裏のバイトの事だ」

「…………」

兼一は新島の言葉で立ち止まった。

「お前、喫茶店のバイトの他に裏でバイトしてんだろ?……しかも、その筋では有名な『黒脚』って呼ばれてるやつだよ」

「…………」

「夜の裏通りでやつてる……よ、おー、新島……ん? ひー……」

新島の言葉を遮り、振り返る。そして、普段の兼一では無い、獰猛な顔つきで新島を睨む。

「やの話、誰とも言ひなよ……?」

「わ、わわわ分かってるー誰にも言わねえよーーー！」

ガタガタと震える新島。自分が地雷を踏んだことに気付き、言わない約束する。

「ならいい……んじゃ、バイバイ！」

新島の答えを聞き、元に戻った兼一は手を降りながら帰宅した。

「…………ふううう」

兼一が廊下を曲がり、見えなくなつたところで大きく息を吐く新島。冷や汗が顔中に流れ出していた。

「あれはヤバいな……地雷だったか。死ぬかと思つたぜ」

震える手で額の汗を拭う。びっしょりと袖が濡れた。

「アイツがあんなヤバい野郎だったなんてな……これはデータを書き換えなくては」

またもや電子手帳を操作し、兼一とは反対方向に歩き出した。その後ろ姿は、まさしく宇宙人だった。

BATTLE2（後書き）

宇宙人登場回。兼一の口調がコロコロ変わるのは人によって使い分けているからです。

……そういうことにしといてください。

BATTLE3 (前書き)

さよなら過去のお話が出来ます。

BATTLE 3

「…………またか」

雀がチュンチュンと鳴きながら飛び、朝の日差しが町を照らすそ
んな日。

とある一軒家の、とある部屋の、とある少年は時計を覚まし、手元
の時計を見つめていた。

「なぜ鳴らない？なぜに鳴らない？君、田覚まし時計だよね？」

形容しがたいこの怒り、手に力が入り、ミシミシと時計に圧がかかる。

痛い痛いと時計が言つてゐるよくな気がした。

「また、またか……またなのか？」

兼一は顔を伏せ、フルブルと震える。そして……

「遅刻だあああああ！」

叫んだ。

「つまおーよし、着替えた！朝飯は……食パンでいいやー！」

急いで着替えて顔を洗い、歯磨きをした兼一は、食パンを食わえ、ショルダーバッグを肩にかけた。

「ヤバいやばい！」

玄関に行き、靴を履いて扉を開けた。一面の青空、白い雲、天気は快晴だ。

「あ、いい天氣……じゃなくて、遅刻だあー」

勢いよく扉を閉め、鍵をかけて走り出した。いつてきますも言わずに……

「どうくしょーーまた寝過いしたあーーあの田覚まし時計、後でぶつ壊してやるーー！」

田覚まし時計を壊すと決めつつ、学校にむかって走る兼一。

「あ、あれは……」

少し先に金髪の三つ編み少女。風林寺美羽だ。
彼女は遅刻寸前なのにゆっくりと歩いている。

「君も急がないと遅れるよおーーー」

通りすぎ際に急ぐよつ促し、走り抜ける。

「あー。あのこれ……」

彼女はポケットからペンドントを取り出そうとしたが、兼一は聞こえてなかつたよつで、気付かず走り去つていつた。

「……あらり、仕方ないですね。さて、近道近道」
行ってしまった兼一を見送り、彼女はペンダントをポケットに仕舞い、細い路地を曲がった。

「つ、着いた……すいませ……ひい！」

ようやく学校に着き、教室の扉を開ける兼一。開けた瞬間、顔めがけて飛んでくるチョークを首を曲げて避ける。

「……粉碎したよ」

躲したチョークは壁にぶつかり粉碎。粉だけになっていた。

「先生……いつか人殺しちゃうって……あの威力は」

「当たつてないから無問題だ。ほれ」

チョークを投げた張本人、安永は兼一にバケツを手渡した。

「廊下に立つてきま～す……はい？」

そそくさと廊下にむかう兼一は、あることに気付く。

「嘘……」

教室の窓際の席、兼一よりも後から来ていた美羽が、クスクスと笑いながら席に座っていた。

「……」

呆然とする兼一。だが、気にしてもしょうがないと思つた兼一は、教室から出た。

時刻は12時15分。昼休みのチャイムが鳴り、ガヤガヤと教室から出るクラスメイトたち。

「今日も先回り……何者だらうあの娘？」

兼一は一足早く教室から出て外にある敷地内のベンチに座つて弁当を食べていた。

「まあ、いいか……ん、このメロンパン当たりだな。中のクリームが無い」

昼食はコンビニのメロンパン。名前は白い液体メロンパン……そんな名前で大丈夫か?と、言いたくなるような商品名だ。

「昼食がメロンパンつて……せめてカレーパンとか食べたかったな……まあ、贅沢は言えないけど」

たまたま家にあったメロンパンだけで昼食を終える兼一。だが、高校一年生の育ち盛りの時期には足りない昼食だった。

「さて、飴はつと……ん?あれ?な、無い……無いぞ!…」

食後の飴をポケットから出せつとしたところ、何かが無いことに気付き、ポケットや鞄の中を探す兼一。

「無い!…ペンドントが無い!…嘘だろ……落としたのか!…?

ガサガサと鞄を探り、制服の上着を脱いで内ポケットまで探すが、目当ての物は見つからない。

「あの!…お探しの物つてこれですか?」

「…?」

声に気付き、後ろを振り替える。だが、いるのは一本の木だけ。キヨロキヨロと辺りを見渡したが、誰もいなかつた。

「あ、上ですわ」

「上!…?うわっ!」

上だと言われ、木を見上げると見えたのは靴の底。咄嗟に右腕でガードすると、ちらりと見える肌色と白い布。

「へ?…?ふつ!」

思わず光景に動きが止まつた兼一の顔に、もう一方の足が乗つかる。

「……なに？何かボクに個人的な恨みでもあるわけ？」のあいだと
いい、これといい……」

「「めんなさこ」「めんなさこ」……」の高校スカート短くて……

顔に靴の跡ができる、自分怒りますよと頭に怒りマークが浮かび
上がる兼一に対し、ペコペコと謝る美羽。

「まつたく……ま、役得もあつたけど

「へ？」

「いや、なんでもない」

さつきの光景を思いだし、口元がにやける兼一。口に手でいたよ
うでバレないよついにやけた口を手で隠した。

「私のバカ！えい！……あ、そうですね。あなたの落とし物つてこ
れですか？」

左手で頭をコツンと叩き、反省する美羽。その後、ポケットからペンダントを取りだし、兼一に渡す。

「ああ……ボクのペンダントーあ、あつがとう！」

兼一はすぐにペンダントを受け取り、嬉しそうに美羽にお礼を言
う。

「よかったですわ。大事な物なんでしょう？」

「はい、大切な物です。すぐ大事で、大切な……」

受け取ったペンダントを握り、さつきのにやけ顔とは大違ひな、優しい笑みをこぼす兼一。

「（あ……優しい笑顔……本当に大切な物なんですね）」

美羽は兼一の笑顔を見て、この人はいい人だと思った。

「（でも……どこか悲しそう？）」

だが、美羽はその笑顔の奥に悲しみが見えた。優しいけど悲しい、そんな複雑な感情がある気がした。

「あの……」

「あ、はいー」めんなり、ボーッとしてましたですわ！」

兼一の呼び掛けに反応する美羽。考え方をしそぎてボーッとしていたようだ。

「いえいえ、本当にありがとうございます」

「あ、お、お礼はいいですわ……あ、そうですわ」

美羽は兼一にお礼を言われ、少し照れるが、いい事を思い付いたよつとポンと手と手を合わせる。

「（反応が古い気が……）なんですか？」

「あの……私と友達になつてくれませんかですか？」

「…………へ？」

もじもじしながら、美羽の言葉に少し間を開けてから、気の抜けた返事をする兼一。

「いや、まあ、別にいいけど、本当にですか～！」……「うん」

友達になると、兼一に心の奥から嬉しそうに声を出す美羽。よっぽど嬉しかったのか、わざいと言いながら喜んでいた。

「（可愛いな……）こんな事で喜ぶなんて）」

兼一は些細な事で喜ぶ美羽を可愛いと思つた。

「これで一人、友達をゲットですわ！！」

「ははは……」

「自己紹介がまだでしたわね。私は風林寺美羽。美羽と呼んでください」

「あ、ボクは白浜兼一、兼一でいいですよ」

「はい、兼一さん！」

互いに自己紹介を済ませ、ベンチに座り会話をする。

「あのう、色々教えていただきたいのですが……この学校、新体操部あります？」

「ああ、あるよ。たしか大会で優勝したとか……」

「あるんですか、よかつた～」

と、部活の話をす。

「新体操やるんだ?」

「ええ少し。なるべく女の子らしいスポーツがしたくて……兼一さんは?」

「ああ、ボクはバイトが忙しくてね……部活には入ってないんだ」「へえ～バイトですか……運動部かと思いましたのに」

「へ? なんで?」

「だつて、身のこなしがどこか運動部っぽくて」

「――口――和やかな雰囲気で会話をする2人。

「まあ、それはちょっと……武術をかじってるからさ」

「…………」

笑顔で答える兼一に対し、黙る美羽。

「そうですか……やはり」「ん？」

突然、一陣の風が吹いた。和やかな雰囲気が鳴りを潜め……

「なさるんですか……武術」

「……」

ピリッとした空気が、2人の周りを取り囲む。

美羽の目が不思議な輝きを見せ、兼一もその空気に当てられ、目の奥に不思議な輝きを見せる。

「…………」

「…………」

見つめあつたまま止まる2人。まるでここだけ時間が止まり、別世界のようになっていた。

そんな時、突然鳴り出すチャイム。昼休みが終わつたようだ。

「あ、まずいですわ！遅れてしましますわ！」

「しかも次は日本史！奴だ……奴が来る！」

「急ぎましょ兼一さん！」

「あ、待つて美羽さん！」

さつきまでの空氣はどこにやら、普段通りの2人に戻り、バタバタと教室に走り出した。

「さあて、帰る帰る……今日はバイト無いし……夕飯何作ろうかな？」

カアカアとカラスが鳴き、日が沈みかけ空がオレンジ色に染まる夕暮れ時。学校は下校の時間を迎え、兼一は帰宅していた。

「買い物していこうかな?……いや、まだ冷蔵庫に鶏肉があつたな……トマトもあるし、今日は鶏肉のトマト煮かな?」

今日の夕飯の献立を考えながら歩いていると……

「ん?なんだ?」

遠くから怒鳴り声が聞こえる。この先の曲がり角からのようだ。

「……げつ」

そこにいたのは黒い車に4人の男。まさにヤクザな格好をした方々だった。

「ん?……あれは」

そして絡まれているのは金髪の少女……美羽だ。隣にはおじいさんと地面に散らばったミカン。

「おじこさんを突き飛ばすとせどりの事でしか？」

「ちんたら道の真ん中歩いているから隅にどかしたんだよー。」

「お前ら弱いんだから隣つゝ歩く……」りや 自然の摂理だろ?。」

美羽は2人の男と話していた。しかもヤクザたちは自分は悪くないと自分勝手な考えを語っている。

「ほら、周りを見てみるよー。」

男につられて美羽と兼一は周りの人を見渡す。そこには、ヤクザを素通りし、見ないようにしているサラリーマンや主婦。気付いていたのに助けようとせず、見ないふりをしていた。

「…………」

その光景を、見つめる兼一。そして思い出す昔の思い出。

「…………うひ」

舌打ちをし、頭を振つて忘れるよつとする。

「（結局、みんな同じなんだ……あの時だつて……）」

忘れよつとしても忘れられないあの情景。幼い頃の記憶。

黒い服装を纏つた大人たち。

お経を読むお坊さん。

泣きもせず、笑いもしない無表情の子供。

男性と女性、そして少女の写真。

そして、ひそひそと話す大人たち。

なんである子だけ……

誰が面倒見るのよ……

私はダメよ……もう子供がいるもの……

遺産だけはあるようだぞ……

ふん、貴様はそればっかりだな……

お前も同じだらうがよ……この金の亡者か！

子供の事を見て見ぬふりをしたり、金だけのために引き取らう
としたりする下劣な大人たち。

「（僕は……なんのために）」

無表情の少年。何も[口]さないその瞳は、ジッと畳の床を見つめて
いる。

「（なんのために）……」

「（たくはいいから、あやまちなさい）……」

「 はつ！」

美羽の言葉で現実に戻る兼一。美羽の方を見ると、ヤクザの一人に頭を押さえられ、頭を下げていた。

「 どうも物分かりがわりーな……」

「 弱い者が、常に逃げると思つているなら……」

「 ！」

おい、クソガキ……お前、弱い奴がいつも逃げてると思つて
いるのか？

だつて、そうでしょ？弱い人はいつも虚められて、独りぼっち
で、逃げ回つてるでしょ？

ふんっ、ちげえよ……人は誰だつてなあ、牙を持つてるもんだ

……

きば？

おお、牙だ。弱い奴はその牙の使い方が分からなかつたり、使
つても勝てないつて思つてんだ……

なら、どうすればいいの？どうすれば強くなれるの？

簡単だ、牙を研げばいい。長い年月をかけて、丁寧に鋭く研ぐ

のれ。

研ぐまでに時間がかかるよ。その間ビリすればいいの？

ああ？ そんなの決まつてんじゃねえか。逃げればいいんだよ。

結局逃げるじやん……

だからあ、ただ逃げるんじやねえよ……

「あなたの方がよほど、物分かりがわるいですわよ……」

「何だと」のガキ……

「何がなんでも生き延びて、泥を啜りながら逃げて、それでも牙を研いで……

「…………」

兼一はヤクザの近くまで歩み寄った。

最終的には……

「ああん？ なんだてめえ？」

「兼一さん？」

弱い奴でも……

「.....」

逃げずに戦えるやー。

「首肉ハニー！」

「ぐえつーーー！」

兼一は、グラサンをかけたヤクザの首を後ろに蹴り抜いた。

まあ、その為には勇気と信念と根性が必要なんだがな……

おい、クソガキどする？弱こまま逃げるか？それとも……

「おこ、てめえひ……」

グラサンの男は首を押さえながらバタバタとのたうち回っている。美羽の近くにいるヤクザ二人と車の近くにいたヤクザはこちらを呆然と見ている。

兼一はポケットから棒付きの飴を取りだし、口に加えてからヤクザを見んだ。

俺と一緒に、牙を研ぐために逃げるか？

「レディに手を出してもんじゃねえぞ……クソヤクザ共」

BATTLE3（後書き）

どうしても兼一にこれを言わせたかった！
少し話の内容がおかしいかもされませんが、まあ、細かいことは
気にすんな……申し訳ないです。

BATTLE 4（前書き）

投稿してから1日で7750アクセス……何が起きた？

BATTLE 4

「てめえ……誰だ！」

「はん、てめえに教える名はねえよ」

兼一は二つもの口調ではない話し方でヤクザを睨む。

「ヤクザ相手に何考えてんだてめえ？」

車の近くにいたオールバックの髭ヤクザが兼一の近くまで来る。

「さあ……何考えてたんだうつな? 気づいたら蹴つてたわ

「クソガキ～よくも田中を」

美羽の近くにいたパーマので右田に傷がある男は、ポケットに手を入れた。

「へえ、田中つていうんだ? なんとも普通だな。改名してハ九さんにしたらどうだ? ハ、九、さんでヤ、ク、ザ……ふふつお似合いじやねえ?」

「てめえ……なめやがって! 鼻を削ぎ落としてやるぜー!」

パンチパークの男、パンチさん(仮)は、ポケットからドスを出した。

その瞬間……

「ぶふえ！」

顔面を蹴り抜かれた。

「オ、オレを踏み台にしたあーー？」

「きょおおおーー指がああーー！」

蹴り抜いたのは美羽。頭を押さえていたドレスの男の指の関節を外し、オールバックの男を踏み台にしてパンチさん（仮）を蹴り飛ばした。

「ぴゅーっ……やるなあ」

鮮やかに蹴った美羽に対し、口笛を吹きながら感心する兼一。美羽は蹴った反動を使い、空中で2回転してから着地。

「おつむにきましたわー！」

いつの間にか眼鏡を外し、髪紐が解けて三つ編みがロングヘアに変わった。その姿はいつもの美羽とは違い、これこそが本当の風林寺美羽の姿。

上から落ちてきたドスを見ないでキャッチし、ヤクザ共を睨む。

「いい大人が、こんなオモチャ振り回すんじゃありませんー！」

美羽はドスを車の窓ガラスに突き刺し、上に持ち上げ刃をへし折った。

「「」「」のアマあーー！」

踏み台にされたオールバックは、後ろから美羽に殴りかかる……
だが、その攻撃は空を切った。

「身軽だなあ……」

美羽は後ろからの攻撃を見ずにバク転をして躲した。その身軽さ
に兼一は感心しつぱなしだ。

「「」のガキ！ーー」「」の……」

着地した美羽にオールバックは右腕を降り下ろすが、左足を上げ
左手を膝の近くに置き、右手を添えた防御でガードする。

続けて左のアッパーをしゃがんで躲し、掌を相手にむけ右手を脇
腹の近くに、左手を右手に添えて左足を前に移動させながら……

「ていつーー！」

左足で震脚、右の掌底を相手に叩きつける。
オールバックは口から歯を吐きながら後ろに倒れた。

その動きは……まるで風を切る羽のようだった。

「す」「」……」

その姿はとても美しく、思わず見とれるほどだった。

「クソ……くらえやああー！」

指を外されたドレッド頭は、美羽に殴りかかった。

「ひおおお……お、お?」

「あつたく……空気が読めねえクソドレッドだな」

ドレッド頭が殴る前に兼一は右足をドレッド頭の後頭部に乗せた。

「受付レシーバー」

「ぐまあーーー」

右足を首に絡め、地面に降りてドレッド頭の顔を地面に叩きつけた。

「クソドレッドが……地面でも食いつこう」

兼一は右足を降り、ピクピクと地面に寝そべったドレッド頭に吐き捨てる。

「あつがとう」とこますわ、兼一さん

「ん? ああ、美羽さん。大丈夫?」

「はー、お陰おひんさまで」

「ハハハ」と微笑みながら近づく美羽。

「あー、おじさんー無事ですか?」

「ええ、ありがと「ひ」やこまわ……」

地面に座り込んだおじこさんに手を差し出しつゝ立ち上がりせる。

「はい、どうぞ」

「ああ、ありがと」

「うう、あいつは……食べ物を粗末にしゃがつて」

美羽は杖をおじこさんに渡し、兼一は散らばったミニカンを拾い集め、紙袋に入れていた。

「これでよし…おじこさん、もつ絡まれないよつて下さこね」

「すまんねえ、世の中まだまだ捨てたもんじゃないのひ」

おじこさんはしみじみと言つた後、紙袋と杖を持ち、一礼してから帰つていった。

「ふう……さて、帰りましょうか」

「はーーー兼一さん、助けていただいて、ありがとうございますー。」

「いやいや、どこでござました」

兼一は純粋なお礼に気恥ずかしくなり、顔を赤らめながら頬を搔く。

「私、男の方に助けていただきなんて生まれて初めての経験でした

わ

「ははは……そりゃあ、あんなに強ければねえ」

兼一はさつきの美羽の戦い方を思いだし、苦笑する。

「INIの人たち……どうします？」

「……放置しますか」

倒れているヤクザたち……氣絶しているようだが、放置する」と
にした。

「あー私、今から買い物に行かなきゃですわーそれでは兼一さん、
また明日ー！」

「あ……行っちゃった。というか速いなあ……」

用事を思い出した美羽は、鞄を持って走り去つていった……タイ
ムサービスがどうのうのうのと言しながら。

「ボクも帰る……ん？これって……」

地面に落ちていた眼鏡。美羽は外したまま忘れていったようだ。

「意外とおっちょこちょいだな……ん？あれ？これおかしいぞ？」

ふと兼一は何かに気付き、眼鏡をかけた。だが見える景色は変わ
らなかつた。

「……これ、度が入つてない。なんでだ？」

眼鏡を外して考えるが、いくら考えても答えは出なかつた。

「まあ、いいか。明日返す時に聞いひ」

兼一はポケットに眼鏡を入れ、棒付きの飴を舐めながら歩き出した。

「ぐえつー！」

倒れているヤクザを踏みながら……

「もうこのパターン飽きたわあ！－！」

次の日の朝、こつものよつて兼一は走っていた。

「田覚まし時計なんて嫌いだあ！－！明日壊す！絶対壊すう！－！」

またもや鳴らなかつた田覚まし時計。もはや呪われてるんじゃないかと思つほど自分の仕事をしていない。

「……あ、あれば

前方に猫と戯れている美羽。頭からハートが出るほど猫に夢中だ。

「美羽わ～ん遅刻しちゃう…… よおおおーーー」

後ろから話しかけ、右手が背中に触れよいつとした時、美羽は突然右手を掴み、一本背負いをした。

ギリギリで両足を地面に着け、背中から落ちるのを回避。

「……ピンク」

「あ……あやあー」

「へっふーーー」

空を見上げてる状態の兼一の視界には、青空とスカートと肌色とピンクの布。

投げた事と、見られた事に気付いた美羽は、咄嗟に兼一の田を踏んだ。

「あやああーーめ、田が！田がああー」

「も、申し訳！れこませんーつい条件反射で……」

田を手で覆ごし、「口口口とのたづひ回の兼一。ペロペロと謝る美羽。何事だと「かうを見ゆナラコーマン…… おれにカオス。

「お、おせよハハハれこます…… 美羽わ～」

「おせよハハハれこます兼一わ～」

涙目になりながらも挨拶をする兼一に苦笑いをしながら挨拶を返す美羽。

「昨日せどりもありがと、いります。兼一さん、やつぱりお強いですわね」

「え、あ、いやあ、それほどでも」

兼一は褒められ、照れ臭そうにしてくる。

「最初のお友達があなたみたいな方でよかったですわ」

「ちよ、照れますつて……ああっ……もうこんな時間……急がないと3日連続遅刻だ……」

照れながらも腕時計を見ると、時間が無い。そのままではまた遅刻してしまう時間だ。

「あの、よろしければ……近道知っていますけど」

と、田をぱちくじしながら言いつ美羽。

「え、本当ー? やつぱりかあ……いつも先回りしてくるからおかしいとは思つたよー……あ、そうやつ」

今まで疑問だった事が解決した兼一。ふとポケットの中にあるものと思いだし、取り出した。

「これ、昨日落ちたの拾つといったんだ」

取り出したのは昨日拾つた眼鏡。兼一は美羽に渡した。

「あーああ……ありがと「いざ」こますですわ」

眼鏡が無い事に気が付いた美羽は、慌てて眼鏡をかけた。

「…………」

「さて、では案内いたしますわー」

美羽は近道を教えるために先に歩き出した。

「ねえ……美羽さん？」

「ほえ？」

田の前には10メートルほど幅がある川。

美羽は柵に足をかけ、話しかけてきた兼一の方を振り返る。

「さっきから飛び越えたり塀の上を歩いたり……色々言いたいことがありますが……」

さつきまで通つた近道。といふか、人が普通通らないよつた塀の上や土手など、道とは言わない場所を歩いてきた。

「これだけは言わせて下さい……」

「はい」

プルプルと震え、うつむく兼一。

「ひやつ！」

突然大声を張り上げた兼一。その声に驚く美羽。
それもそのはず、目の前にあるのは川。しかも横幅約10メートル。

「！」を飛び越えれば学校はすぐですわよ

「いや、知つてますけど！知つてますけど！…普通あり得ないでしょこればっかりは！？」

？」

必死にツツコミを入れる兼一だが、言っている意味が分からぬと言わんばかりに首を傾げる美羽。

「とにかく、時間がありませんですわ……先に行きます！」

美羽は高くジャンプし、向こう岸の柵に着地。スカートが巻くれ上がり、ピンクの布が丸見えだった。

「いやん！ ですわ……」

「…………」

柵の上でスカートを押さえる美羽。痛そうに頭を押さえる兼一。

「兼一 やん、 急いでーーー！」

「…………くわつーーー！」

美羽に急かされた兼一は、柵に足をかけた。

「行くぜえーーーあい きやん ふらーーいーーー！」

気合ないと共にジャンプする兼一。美羽並みに高く飛び、柵に届く
かと思いまや……

「あ、しまった……あれ着けっぱだつた……」

突然失速。重力により地面に引つ張られ……

「…………はぶつーーー！」

柵に顔面からぶつかった。

「け、兼一 ゃん！？」

明らかに届くかと思い氣や、突然失速した兼一。どこか変な失速
の仕方だった。

「だ、大丈夫ですか？」

「……あい わやんと ふらい……」

兼一は鼻血を出しながらなんとか這い上がり、バタリと倒れた。

BATTLE5（前書き）

9000アクセスwww
笑いが止まらんwww

見ていただき、ありがとうございます！

BATTLE5

「『めんね美羽さん……ボクのせいで遅刻しちゃって』

「いいんですね。だって、お友達でしょうね？」

2人はあの後結局遅刻し、仲良く廊下に立たされていた。

「友達か……そうですね」

「そうですわ」

クスクスと笑う美羽。兼一もつられて笑った。

「んじゃあ、友達として質問していい？」

「なんですか？」

兼一は人差し指を立て、美羽に質問をした。

「その眼鏡、なんで度が入つてないのかな？」

「――！」

美羽は兼一の質問に驚き、止まってしまった。

「…………」

「（もしかして、地雷だった？）」

止まつたままの美羽。聞いてはいけないとだつたのかと兼一は少し気まずそうにしていた。

「実は……前の学校では、1人も友達が出来なくて」

ポソリと美羽は昔の話をし始めた。

「なぜだらうって思つてたら、ある日……親切な子が教えてくれたの」

あんた目立ちすぎなのよ……

「（ひがみか……）」

「だから、今度の学校では、とにかく目立たないようにしようと、地味な格好を研究したんですね……」

苦笑しながら悲しそうにする美羽。兼一は黙つて話を聞いた。

「でも、今は兼一さんという素敵なお友達が出来て、とっても嬉しいですわ」

「……！」

美羽は二コツと兼一に笑顔を見せた。突然の笑顔の不意討ちに頬を染める兼一。

その笑顔は、とても輝いていた。

「あ、ありがとう？」

「クスクスッ お礼を言つのは私ですわ」

2人は互いに笑い、終始和やかな雰囲気だった。

放課後を知らせるチャイムの音。部活に行ったり、下校したりする生徒で騒がしい。

「さあて……帰りますか」

「あ、兼一さん！一緒に帰りませんか？今日は部活が無い日です的一少し用事があつて待たせてしまうことになりますが……」

ショルダーバックを背負い、席を立つた兼一に美羽が話しかける。

「すいません美羽さん……今日バイトなんですよ」

一緒に帰ろうと誘つた美羽に兼一はバイトがあると断つた。

「バイトですか……残念ですわ。そういうえば、何のバイトをしてますの？」

残念そうにする美羽だが、兼一のバイトが気になり、質問した。

「喫茶店ですよ。喫茶マツエツで、厨房の仕事をしてます

「喫茶店……すごいですね！」

「今度来てくださいね。お待ちしております」

兼一は執事のよつにお辞儀をした。そのお辞儀の仕方にクスクスと笑う美羽。

「はい、今度行かせていただきますわ」

「じや、また明日」

「はい、また明日ー。」

そうして、兼一と美羽はそれぞれ帰つていった。

「今日も頑張りますか……ん？」

靴を履き、敷地内を歩いてこるとビルからか怒鳴り声と女子の声が聞こえた。

「……あつちか?」

少し氣になり、声のする方へ行く兼一。声は校舎の裏から聞こえ
る。

「おい！何しやがるてめえ！俺に水かけやがつて！！」

「アーリーのことを知る者は、アーリーを殺す者だ。」

「黙れやー。」

「ひいー。」

そこには2人の胴着を着た男と、黒髪を三つ編みにして、2つに分けた眼鏡のセーラー服の少女がいた。

少女は泣きそうな顔をしながらオロオロとしている。

「……たしかあの娘、泉さん?」

少女の名前は泉優香。同じクラスの園芸部の部長だ。

「あの……許してください……」

「許すだあ？」

「おいおい、簡単に許すと思つてんのか?」

角刈りと坊主頭の男2人。胴着のズボンには、濡れた後がある。
そして、泉の近くにはへこんでいるジョウロ。

「……誤つて水をかけたのか?」

状況を分析し、兼一は助けるために歩き出した。

「……お前、以外と可愛い顔してんな

「裏に連れ込むか?」

「いいねえ」

「ひつ……」

胴着の男たちは、下劣な笑みで泉を舐め回すよつに見たあと、ゲスな事を言い出した。

泉はその言葉を理解し、涙目になりながら逃げよつとした。

「おつと待ちな！」

「わやつ……」

「……！」

逃げよつとした泉の三つ編みを掴んだ角刈り。急に髪を引っ張られ、地面に跪く泉。

それを見た瞬間、兼一は走り出した。

「逃げんじゃねえよ……」

「たつぱり可愛がつてやるふああ……」

「なつ……」

「……え？」

坊主男の台詞の途中、兼一は頬を飛び蹴りで打ち抜いた。

「ふげえがぱらりあ……」

坊主頭は意味の分からぬ言葉を吐きながら吹っ飛ばされ、「口

「口と地面を転がる。

何回転かした後、動きが止まり、そのまま気絶した。

「…………」

「てめえ……いきなりなんだ！！」

「し、白浜……君？」

兼一は着地し、角刈りの方を睨む。角刈りは泉の髪を放し、体を半身にし構えた。

「てめえ……レディの髪の毛引っ張り、しかもゲスな事まで考えやがって……3枚にあらすぞ！」

怒り心頭。まさにその言葉が相応しい顔で角刈りに話しかける兼一。

「なめやがって……不意討ちしたぐらいでいい気になつてんじゃねえぞお！！」

角刈りは兼一にむかって走りだし、右手の正拳突きをした。

「ふつ！」

兼一は正拳突きを上体を後ろに曲げ、躱した。

「なつ！…消えつ！」

そのまま地面に手を着けるほど体を曲げ、膝を曲げて逆立ちの状

態になつた兼一。

「木犀型斬」 ブクティエール

「下」

そして、体をバネにし一気に相手の顎を……

「シル・トーナメント」

「ぶうぶえつ！！」

蹴り抜いた。

頸を蹴り抜け、數セントに飛ぶ角刈り。
兼一は勢いのまま角刈りを飛び越え、空中で1回転した後着地。
兼一が着地した瞬間、角刈りは前に倒れ、気絶した。

「ふう……デザートはいらっしゃねえか」

「（すゞ）……普段、あんなに物静かなのに……」

泉はさつきの攻防に啞然としていた。そんな泉の方に兼一は近づいてきた。

「血が出でる……大丈夫?」

「へ！？」

気付くと泉の右膝が擦りむけ、血が出ていた。意識したとたん、

ズキズキと膝が痛む。

「だ、大丈夫！ 気にしないで……あ！」

泉は無理矢理立ち上がったが、痛みでよろけて兼一の寄りかかつた。

「あ、う、うめんな……ひやつー！」

思わず謝り、離れようとした瞬間、突然視界が変わった。

「無理しないで、保健室行くよ」

なぜなら、兼一は泉をお姫様だっこしたからだ。突然の事に思考停止する泉。

「な、へ、あ、え？」

「ん？ どうかした？」

羞恥心から顔が赤くなり、言葉にならない言葉を囁つ泉。そんな泉ににこりと笑いかける兼一。

その笑顔を見た瞬間、泉の心臓が、ドキッと音を立てた。

「（え？ 今のって……もしかして）」

ドキドキと心臓が高鳴る。緊張とは違う感覚。

そう、泉はこの瞬間……

BATTLE5（後書き）

不整脈ですね、分かります。嘘です（笑）
オリ展開＆祝！1人目落としました！
これから段々と増やしていくと思います！

BATTLE 6 (前書き)

アクセス数2万越えたwww
何が起きたwwwGWだからか?www
さすがに怖くなってきたよ……(‘・’・’・)
今回ようやくあの場所に行きます!

BATTLE 6

今日はほとんどの人が休みな日曜日。どこかにお出かけする家族や、学校が休みの小学生が元気に遊び回るそんな午後。

「えつと……ニンジンと、玉ねぎ……あとジャガイモ」

とあるスーパーの野菜コーナーに、一人の少年がいた。

「あ、大根が安い！ 買いだな……」

少年の名は白浜兼一。学校が休みなため、兼一はスーパーに買い物に来ていた。

「あとオリーブオイルも……どじだっけ？」

兼一の手にある買い物かごの中には、野菜や魚や肉など多くの食材が入っていた。

どれも兼一が厳選した質の良いものばかりである。

「あつちだっけ？ ……あ」

ふと兼一は人混みの中、とある人物を見つけた。

「これも買いましょうか……」

金髪でロングヘアで、普段の格好とは違い白いセーターに下はスパッツ、いつもの眼鏡を外した少女。名を風林寺美羽。

「美羽さんだ……美羽さん」

「ほえ？……あ、兼一さん！」

兼一が声をかけると美羽は振り返り、兼一に気付いて手を振る。

「買い物ですか？」

「はいー…せうこう兼一さん！」や

「冷蔵庫がもう空なもので……」

学校と同じように会話する2人。美羽の手にも買い物かごが握られていた。

「今日は眼鏡無いんですね」

「ええ、今日は休日なので」

「やつぱり眼鏡無い方が可愛いでありますよ」

「いやですわ～兼一さんたら…褒めても何もできません」とみ

兼一に褒められ、恥ずかしそうにしながらもまんざらでもない美羽。

「今日は1人ですか？」

「いえ、今日は「美羽。米はこれでいいかね?」あ、はいー・秋雨さ

「ん

2人の会話に入る1人の男性。平均身長より高めな背丈、黒髪でダンディーな口髭を生やした胴着の男。

「えっと……お父さんですか？」

「違うよ。私は岬越寺秋雨、この子の住んでる所で共同生活している者さ」

「男性の名は、岬越寺秋雨。またにダンディーな素敵なおじ様だ。
あ、そうですか。ボクは白浜兼一です！美羽さんはお友達で、同じクラスの者です」

「ふむ、中々礼儀正しい少年だね。若いのに挨拶がしっかりしてる」「あ、ありがとうございます」

「それ」「…………」

「…………？」

白浜紹介をした兼一に感心した秋雨は、ビートルを見定めるように兼一を見始めた。

「えっと……なんでしょ？」「

「ああ、すまない。気を悪くしたかね？」

「あ、いや、別に大丈夫ですけど……」

少し居心地が悪くなり、恐る恐る聞く兼一。その言葉に気付いた秋雨は、兼一に謝った。

「君……中々おもしろい修行をしているね？よくそれで普通に歩けるね」

「……！」

秋雨の言葉に驚く兼一。秋雨は一目見ただけで兼一のある秘密を見破つた。

「あの……失礼ですが、何か武術をしていますか？」

「ん、まあ……柔道を少々」

「……せつですか」

兼一は秋雨の答えに「ど」か残念そうにしていた。

「あー、せつですわー！」

「へ？」

突然声を張り上げる美羽。兼一はいきなりの事に氣の抜けた返事をする。

「兼一さん、今日私の家に来ませんか？」

「え？」

「……………でか」

「 も、 もうだわ」

「遠慮はこりなによ」

「あ、 はい……」

あれから美羽に誘われた兼一は美羽の家の前に来ていた。
遠慮はいらないとかなりの量の食材を、普通のよりも数十倍は大きいリュックを軽々と背負った秋雨に言われ、口元が引きつりながら答える兼一。

それもそのはず……

「……………でか」

兼一の田の前には、威圧感のある門がそびえていた。

門の上には『泊山梁』と達筆な字で書かれた看板。門の右には『梁山泊』とこれまた達筆な字の看板。

「う……」が美羽の住んでる家、その名も梁山泊。

「え、どうもー。」

「…………」

その趣のある（といつか古い）大きな門を軽々と押して開ける美羽。

「（もしかして軽い？）」

「いや、軽くないよ。普通の人ならね」

「…………」

思っていた疑問に答えた秋雨。声に出していないはずなのに答えた秋雨に驚く兼一。

「え、今……心を読みました？」

「ん? なんのことかね?」

惚ける秋雨。そのままスタスターと去っていった。

「…………（帰ろうつかな？）」

何か言い様のない感覚が身体中を包み、帰ろうつか迷う兼一。

「お友達を家に招待……」つぶつぶ

「…………」

兼一は、すぐ嬉しそうにしている美羽を見て、もう後戻りはできないと心に決めた。

「いじつて道場なんですか？」

梁山泊の敷地内に入った兼一は、辺りを見渡した後、美羽に質問した。

「まあ、そんな感じですわ。教えたりはしませんけど……」

「へえ……」

正門を抜け、右側には母屋。左にはでかい道場。敷地はかなり広く、奥の方には森が見える。

「す、いですね……」

「普通ですかね~」

「…………」

これを普通とは言わないと言わんばかりの表情で美羽を見るが、一瞬ニコと笑いながら案内をしていた。

よほど友達が家に来た事が嬉しいようだ。

「……ん？あれば」

兼一は、道場の近くにいる褐色の肌に水色の髪の2メートルの巨人を見つけた。
その巨人はサンドバッグにものすごい音を立てながら蹴りを放っていた。

「……ムエタイ？しかもかなり強い」

兼一は立ち止まり、ムエタイの男性を凝視した。
ムエタイの男性は、何度も何度もサンドバッグを蹴る。

「すごいな……」

兼一がポツリと言つた言葉に、耳がピクリと動くムエタイの男性。その瞬間、サンドバッグを蹴り破いた。

「おおーーー！」

無惨に破かれたサンドバッグを見て、感嘆の声を上げる兼一。

「があああーーー！」

次はグローブを着けた右手で石の灯籠を碎くムエタイの男性。

「すげえっ！」

「キーンーンーーー！」

今度は木を蹴り、へし折った。

「かつこい……ぶ！」

突然兼一は口を抑えられた。驚き、見上げるとそこには金髪の老人だった。

だが、その老人は背が2メートル、筋肉隆々の巨体の人物だった。

「も、もがつ……！」

「すまんの、あまり煽らないで欲しいんじや……喜んで調子に乗るんじやよ」

その老人は苦笑しながら立派な顎鬚を撫でて言った。

「こら つ！やめんかアパチャイ！！！」

そしてそのままムエタイの男性に怒鳴った。ムエタイの男性は、アパチャイといふらしい。

そのアパチャイは、嬉しそうに家の塀や木を殴り壊していた。

「ふはつ！あ、あなたは？」

「わしかの？わしは美羽の祖父で、この梁山泊で長老じやー。」

老人は風林寺美羽の祖父にして、この梁山泊を纏める長老。その威圧感と肉体は老人とは思えない物だった。

「あ、あの……ボク……いや、自分は白浜兼一ですー風林寺さんの友人をさせていただいてます！」

兼一は姿勢を正し、頭を下げて自己紹介をした。

「ほつほつ、若いのに挨拶がしつかりしてるの」

長老は兼一の挨拶に感心し、顎鬚を撫でながら「ハーハー」と笑う。

「そうかね、美羽の友達かね。これは良い友達が出来てなによりじや」

「ははっ、ありがとついでこります」

美羽の友達だと聞き、嬉しそうにしてくる長老。

「あれ? そりいえば美羽さんがない」

「美羽なら台所にいるはずじゃよ」

「しまった……見るのに夢中で美羽さんを忘れてた」

いつの間にかいなくなっていた美羽。先に台所に行ってしまったらしい。

「それにしても……おぬし、なにか武術をしておるな?」

「え……」

長老の言葉に反応する兼一は、何もしていらないのに自分が武術家だと見抜いた事に驚いた。

「……もしやあなたは、何かの武術の達人ですか?」

「ほつ、達人という程ではないがの……生まれてこのかた負けた事

はないぞ！」

「口と笑いながらす」い事を言つ長老。明らかに達人と呼ばれる部類に入るだつ。

「ここには他にも武術の達人がいるんですか？」

辺りを見渡しながら質問する兼一。周囲にはアパチャイの他には誰もいない。

「 もうひとじやー、ひとつじや、わしが案内しようつかの？」

「えー、いいんですかー？お願いしますー！」

兼一は梁山泊にいる達人を見るために、長老に案内してもらひことにした。

BATTLE6（後書き）

梁山泊の師匠たちを小説で表現するのが難しそうな……

読んでいただきありがとうございました！

BATTLE7（前書き）

総アクセス数35,000突破……お気に入り登録数160件突破

…

……これって他の人から見たら普通なのかしら……？最近分からなくなつてきました。

「それにしても……」ヒロイですわ

「ほつ、普通じやよ普通」

「（二）の祖父にして孫ありだ……」

「失礼な事を思わんでくれ……」

「またかよー？」

長老と歩く兼一は、会話しながら廊下を歩いていた。

「……ん？」

廊下を歩いていると、襖が少し開いている部屋を見つけた。

「（綺麗な人だな……）」

そこにいたのは着物を着た女性だった。黒髪を紐で束ね、ポーテールにしている。

着物はピンク色の紅葉柄で、足元が普通の着物よりも短く、黒いニーソックスを履いた綺麗な足が覗いていた。

「（しかも……特盛ー！）」

兼一の目線の先は、女性の豊満な胸だった。

「つて、え？……なに？」

兼一は目を疑った。女性の背には鞘に入った長大な刀。柄の部分には布が巻かれ、鍔が無い刀を背負っていた。
そして周りには西洋の剣や日本刀、サーベル等、多種多彩な刃物が棒に紐で固定され、刃を上にして立たせていた。

「…………ヒュッ」

女性は一息と共に刀を抜き放ち、高速で刀を振った。
遅れて斬り裂かれる剣たち。半分になつたり3等分されたりと綺麗に斬られ、畠に刺さつた。

「…………うそん」

兼一は女性の太刀捌きに呆気にとられた。

「おい！…ボクに何か用があるのか？」

「…………あ、いや、その……」

いきなり喋り出す女性。兼一は驚き、じどうもどろに答える。

「ならば畠の上からにじる、馬剣星！…」

女性は誰かの名前を呼びながら刀を畠に突き立てた。

「ホッ。いやちょっと、下を通りかかっただけね！しぐれどん。」

畠から勢いよく飛び出ってきたのは黒い帽子をかぶった中国風なお

つさん。

黒く長い口髭と眉毛を蓄え、カンフー服を着た兼一よりも低い背丈の男だった。

名を馬剣星といひらしい。

「用はないね……」

「まて……その怪しげながめらで何を撮っていた？」

帽子を押さえ、立ち去ろうとする馬に、刀を突きつける女性。女性はしぐれといひならしい。

「パン……風景ね！」

手元のカメラを袖に隠し、逃げる馬。
逃がさぬと言わんばかりに胸元から何かを取りだし、馬に投げつけるしぐれ。

投げた物は手裏剣のようだ。3つの手裏剣は馬にむかって飛んでいくが……

「ホツ！」

馬は、両手の人指し指と中指で2つの手裏剣を挟み、もう一つを口で食わえた。

その動きはまさに達人。投げたしぐれも達人のそれだった。

「うわっ！」

襖を開け、逃げる馬。横を通り過ぎた馬に驚き、声を上げる兼一。
そんな兼一にむかって……

「……」

一つの手裏剣が顔めがけて飛んできた。

「ま、マ〇リックス避けリローテツドお……」
飛来する手裏剣を上体を後ろに反らして躲した兼一。
著作権的に（以下略）

「……あちこち覗いてると、危なーぞ」

「……やつこのせ先に言ひてやだせこ……」

兼一の上を通りすぎる前に長老は指で手裏剣を挟みながら言つた。
それを上体を後ろに反らしたまま冷や汗をかき、答える兼一。

「（）（）何…？」

兼一は梁山泊に来た事を心から後悔した。

「さー、次は（）（）やな……（）（）こののは手の達人での、少々
気難しくての（）

「は、はあ……」

長老の言葉に顔を引きつらせながら答える兼一。明らかにヤバい
雰囲気が漂っていた。

「おーい、逆鬼君、いるかのぉ？」

「ああん? なんだじじい……」

そこにいたのは黒髪をオールバックにし、鼻に横一文字の傷、顎に無精髭を生やした強面の男。

筋肉隆々の身体に高い身長、上半身が裸で素肌に一枚の黒い皮ジヤンを羽織り、両腕に白い布を巻いた某世紀末な人のような格好。

空手の達人、名は逆鬼。

「あのお……」

「ああん? なんだこのガキ?」

声をかけた兼一を睨む逆鬼。その眼差しは殺し屋のような鋭い眼だった。

「この少年は美羽の友人でな、達人を見てみたいと言つておつての。今案内していたのじや」

「白浜……兼一です。どうも」

「はんっ! で、お前……俺に何か用か?」

「……空手の達人なんですよね? 何か技を見せてくれませんか?」

「……ちつ……わあつたよ」

兼一のお願いに瓶ビールを口にしビールを飲みながら答え……

「……ふつ！」

片手で瓶を握り、破裂音と共に潰した。そして、天井からぶら下がった4枚の畳の前に立ち空手の構えをとり……

「うえりやあああああー。」

「氣合」と共に抜き手を畳に突き込んだ。殆ど見えない手捌き……
「じんじん置に穴が開き、そして。

「おつかれー！」

右の前蹴りが、一枚の畳を引き裂いた。

11

兼一は、その前蹴りをじっくりと見た。

「へー！」んなもんだな……これでいいか？ガキ？」

「……ええ、ありがとウソヤコサウ」

どこか得意気な逆鬼は兼一に話しかけた。兼一は引き裂かれた置を見た後、逆鬼にお礼を言って頭を下げる。

「ふむ、それそろ3時じゃな……兼ちゃんや、道場に行くぞ」

「え、あ、はい（け、兼ちゃん？）」

兼一は長老に呼ばれ、一緒に道場にむかつた。

「あ、兼一さん…どこにいらしてたんですか…？いつの間にかいなくなつて驚きましたですわ…」

「ははは、すいません美羽さん」

道場には美羽がいてプリプリと怒っていた。

「まあ、いいですね……さて皆さん、おやつですかよ」

美羽の声かけに集まる達人たち。さつき会った人たちだけからするに、人数は長老を入れて6人のようだ。

「さて、丁度集まつたことだし、全員の紹介をしようかの」

梁山泊の達人たちが全員の集合したところで、長老は兼一に紹介を始めた。

「まずは……わたくしも会つた、逆鬼君じや」

「くつ……」

喧嘩100段の異名をもつ空手家！逆鬼至緒！！

「次にムエタイのアパチャイ」

「あぱぱぱ」

裏ムエタイ界の死神！アパチャイ・ホパチャイ！－！

「そして馬……あの帽子をかぶった男じゃ」

「よひしきね～」

あらゆる中国拳法の達人！馬剣星！－！

「今度は柔術家の秋雨君」

「さつきぶりだね」

哲学する柔術家！岬越寺秋雨！－！

「後はあの刀を背負つているのがじぐれ

「……」

剣と兵器の申し子！香坂じぐれ！－！

「そして長老のわし！一人所用で出とるが……これで全員じや」

「は、はあ……」

全員の説明が終わり、茶をする長老。

「あ、ボクは白浜兼一と申します」

「私のお友達ですかー！」

兼一は全員に自己紹介し、それに続く美羽。周りからの反応はよろしくね～や、あぱー～や、へつー等、色々な反応が返ってきた。

「わい、少し聞いていいかな?」

「あ、はいーなんですか?岬越寺さん」

兼一に近付き、話しかける秋雨。

「白浜船……君は、どんな武術をしているんだい?」

「たしかに、中々やるよつね」

「あははははは」

兼一に質問する秋雨。その質問に便乗するよつに話しかけてきた馬とアパチャイ。

「あ、えつと……流派とかは無いんですけど、足技主体の武術です」

兼一は秋雨の質問にじりじりと答えた。

「ふむ……船ほどの実力は独学ではないのだろう?教えた人は?」

続けて質問する秋雨。遠くにいた逆鬼や長老も兼一の近くに寄ってきた。

「えつと……戦う料理人、て言えば分かりますか?」

「戦う料理人……ああ、あの！」

「おお、戦う料理人か！オレも知つてゐるぜ！」

兼一の説明に思い出したと言わんばかりに手を叩く秋雨。逆鬼もその人物を知つてゐるようだ。

「たしか……戦う時は手を一切使わず足だけで敵を圧倒し、女性には絶対に攻撃しないと聞くが」

「しかも、戦争地域や被災地に単身で乗り込み、戦争孤児とかに無償で料理を振る舞うんだろ？噂では、中々美味いらしいじゃねえか」

「ああーおいらんも思い出したね！無類の女好きで、ところ構わずナンパしてるって男ね」

「…………はい、その戦う料理人です」

秋雨と逆鬼、馬の説明を聞き、頭を片手で押さえながらつづむく兼一。

その背中にはどこか影がかかっていた。……おそらく馬の説明のせいだろう。

「ほつ、そうかあの男の弟子かの！わしも会つたことがあるし、料理も食べたことがある」

「え……」

長老の言葉に反応し、兼一は顔を上げて長老を見た。

「い、いつですかー!？」

「たしかあの男が兼ちゃんぐらこの歳の時かのあ?」

「あ…………そひですか……」

長老の言葉に残念そうに落ち込む兼一。

「会つた時に料理を作つてもらつたがの、それはそれは…………今まで食べたことが無いほどに美味かつたわい!」

「あ……ありがとう!」とこますー」

落ち込んだ顔が一転、自分の事のよつに喜ぶ兼一。長老の言葉がとても嬉しかつたようだ。

「私も会つたことがあるよ…………たしか2年前ぐらいだつたかな?」

「…………本當ですかー!？」

秋雨の言葉に驚き、秋雨の方を勢いよく振り向く兼一。

「い、いつたことどー!…………ちひ

兼一が質問しようとしたとたん、ポケットの中から携帯電話の着信音が鳴った。

「…………すこません、ちょっとよろしいですか?」

「ああ、構わんよ

兼一は携帯を開き、電話の相手を確認した後、秋雨に許可を得てから道場を出た。

「…………はい。…………今日ですか？…………はい、場所は？…………ああ、またあそこですか…………はい…………はい、分かりました今から行きます」

電話が終わり、携帯を閉じて道場に戻る兼一。

「すいません！バイトが入っちゃって…………今日はもう帰ります」

「ええ！？もう帰つてしまわれるんですの？」

「いめんなさい美羽さん…………」

美羽は残念そうな顔をし、兼一はそんな美羽に謝った。

「今度また来ますから…………岬越寺さん…………今度さつきの話を詳しく教えてください！」

「ん、分かった」

「それでは皆さん……お邪魔しました！」

兼一は梁山泊の達人たちに一礼し、玄関にむかつた。

「あぱー！あの門重いからアパチャイが開けてあげるよー。」

「ありがとうございます、アパチャイさん」

心優しき大男、アパチャイは門を開けるために兼一と一緒に玄関にむかつた。

「あ、待つてくださいまし兼一さん！」

それを追いかける美羽。道場には達人たちだけが残つた。

「先ほどの顔……」

「ふむ……」

秋雨は兼一の顔つきに何かを感じ、長老は額縁を撫でる。

「うん、今の顔はあるで……」

「……」

眉毛に隠れた目を鋭くする馬、いなくなつた兼一の方を黙つたまま見つめるしぐれ。

「ああ、あれは……」

全員の考えに同意する逆鬼。

去つていく時に見せた兼一の顔つきは……

「あはー！」

「ありがとうございますー！ではよひなり」

「はい、わよつなり兼一さん。」

「あはは～一昨日来やがれよ～」

「アパチャイさん！」

「…………それで」

九月

「心」.....「心」

門が閉まり、一息つく兼一。ズボンのポケットから何かを取り出した。

「行くか」

兼一が取り出したのは何も装飾されていない、黒い皮の手袋だつた。

戦いに赴く武術家の顔だつた。

BATTLE7（後書き）

やつと梁山泊の達人全員出せました！

……凄く苦労しました。

それによつやくロミックス1巻分書けましたー所々省いてますが、

…ま、細かいことは（以下略）

BATTLE&（前書き）

総アクセス数48,000突破！お気に入り登録200件突破！！
本当……感謝感激です！

しぐれの口調を指摘されましたが……原作1巻を見ると、しぐれの
話し方が今の口調と違つんですね（苦笑）

迷つたあげく、漫画通りのセリフにしてしまいました（泣）
今度からは今の口調にしていきたいと思います！
ご指摘ありがとうございました！

BATTLE 8

「ふああ……眠い……」

「大丈夫ですか？兼一さん」

今日は月曜日、休日明けで体がダルい学生たちを太陽の光が容赦なく照らす、快晴の朝。

そこに眠そうに欠伸をする兼一と心配そうにしている美羽がいた。

「大丈夫です……ちょっとバイトが忙しかったもので……ふああ

「大変ですね……」

欠伸混じりに答える兼一。田の下にはつらうらと隠が出来ていた。

「ま、授業中寝るから……問題無いですよ

「いや、授業は寝るためのものじゃない気が……しかも今日は安永先生の授業がありますわよ」

「我が眠りを妨げる者は、たとえハゲでも許さ……ふああ

「くすくす……」

授業中寝ると欠伸をしながら宣言する兼一に、くすくすと笑う美羽。

「はあ……今日一日は平和であつまかよつて……ふああ

学校の正門に着き、晴天の青空を見ながら言ひ兼一。窓には雀が2匹、仲良く飛んでいた。

「あ、し、し、し、白浜君ー」

「ん?……あ、泉ちゃんとおはよー」

「お、お、おはよー」

教室に入り席に座らうとした瞬間、眼鏡をかけた少女……泉が話しかけてきた。

頬を赤く染め、じもじながら挨拶をする泉。

「あ、あのね、白浜君……」

「ん?…どうしたの?」

後ろで手を組み、もじもじとしながら話す泉。

「そのね、あの……」、「今度の口羅口羅?」

「へ?…ああ……多分、暇かな?」

「そ、そつなんだ!」

兼一の返事に泉は明るい笑顔になり喜んだ。

「あのれ……だつたら……今度の日曜日……」

泉は後ろで組んでいた手を強く握る。その手にはチケットが2枚握られていた。

「一緒に……映画」

覚悟を決めた泉、デートに誘おうとした瞬間……

「席に座れえー！」

「ひやつーー！」

安永が教室に入り、驚いた泉は兼一を誘つ事が出来なかつた。

「し、白浜君！また後でーー！」

「あ……行つちやつた。ふああ……ね、眠い」

朝のホームルームを始めた安永、だが兼一は話を聞かず……

「…………ぐう…………ぐう」

腕を枕にし、顔をうつ伏せにして眠つてしまつた。

「…………よし、じゅ日直ー！」

「きりーつ、れーい」

朝のホームルームが終わり、騒がしくなる教室。終わったとたん泉は兼一の方を見た。

「しり……あ、寝てる……」

だが、兼一は気持のよそつかないべつすりと寝ていた。

「しょぼ～ん……」

データーに誘えなかつた事に落ち込む泉。

「どうした? 泉」

「あ、姫野ちゃん!」

そんな泉に話しかける黒いロングヘアに頭にカチューシャを着けた少女。

「なんだ、誘えなかつたのか?」

「う……だつてえ……」

彼女の名は姫野真琴、ナギナタ部。兼一と同じクラスで泉の友達だ。

「誘おうとしたけど……白浜君が」

「ん？ああ、白浜寝てるな……起きせば？」

「な、だ、ダメだよーーせつかく気持ちよみがいで寝てるのこ……」

「……たしかに気持ちよそうに寝てるな」

姫野の意見に手をバタバタとさせ断る泉。

姫野が兼一の方を見ると、よだれをたらしながら寝ている兼一の姿。

「……ほー

「おー、泉？ 泉ーー戻つてーーい

兼一の寝顔を頬を赤らめながら見続いている泉。

「まつたく……（惚れてるねえーまあ、たしかに白浜は顔は悪くな
いが……）

ちらりとまた兼一の寝顔を見る姫野。

「（ま、私には関係無いか……泉の恋の応援をしてあげよーー）

姫野はグッと右手を握り、決心した。

「……いい加減に戻りなさいーー。」

「あいたーーーう、ヒドイよ姫野ちゃん

姫野にチョップされた泉は、叩かれた箇所を撫でながら席に戻つ

た。

「よし！ 昼休みだ！ 泉、次こそは誘えよ！」

「う、うん！ が、ががが頑張つて！」

いや、頑張るのほお前だぞ……」

昼休みのチャイムが鳴り、ガヤガヤと騒がしくなる教室で泉と姫野は話していた。

「さて！行け、泉！！」

「う、うじやー！……ってあれ？いない」

-
^?
[

気合いを入れて話しかけようとした泉だが、兼一はもういなくなっていた。

「...しよせん」

「あ、だ、大丈夫だつて！絶対どつかにいるんだから、探しに行くぞ！」

「あ、待つてよ〜」

落ち込んだ泉を慰め、兼一を探しに行く姫野。そんな姫野を慌てて泉は追いかけていった。

「いなーいなあ……」

「いなーいねえ……」

場所は屋上。何人か生徒がいるが、どこにも兼一はない。

「仕方ない、昼食にするか！」

「…………うん、そうだね！放課後にでも誘つよー。」

「その意気だー。」

泉と姫野は話しながら網のフーンスの近くに歩いていった。

「…………あー。」

「ん？…………げ」

泉がふと下を見ると、何かを見つけ声をあげた。

姫野はその声に気付き、その視線の先を見るとそこには……

「最悪だ……」

ベンチに座る美羽と兼一。楽しそうに会話をしながら昼食を食べていた。

「……あの2人って、付き合つてるのかなあ？」

「う……」

暗い表情になる泉。何て声をかけて良いか分からず、言葉を失う姫野。

「（最悪だ……）」

頭を抱える姫野。どうしようか迷つてると……

「てめえらーーーどつか行きやがれー！」

「ーーー」

いきなり屋上の扉が開き、男子生徒が5人入ってきた。
絡まれないように逃げる生徒たち、姫野と泉も逃げようとしたが

……

「ん？おいてめえーあの時のー！」

「え……ひ、ひーー！」

ある1人の男子が泉に話しかけてきた。

坊主頭に右頬に湿布を貼った男。この間兼一に飛び蹴りされた男だつた。

「あいつのせいで佐々木が入院したんだぞ！！」

あの時顎を蹴り抜かれた男は佐々木と言つらしく、あの後入院したようだ。

「おい、どうした……」

「あ、筑波さん！」

後から来た体格の良い黒髪の男。空手部副将の筑波だ。

「聞いてください！俺と佐々木を蹴った男は、この女の知り合いなんですね！」

「……ほひ」

坊主頭は筑波に説明し、興味深そうにする筑波。

「おい大門寺！この女を捕まえろ！」

「押忍！…！」

「きやああ！」

5人のうちの筋肉隆々の男、大門寺は筑波の命令通りにし、泉の腕を掴んだ。

「泉……わやつ……」

泉を助けようとした姫野は、筑波に首を掴まれた。

「……お前も」この時の知り合いか

「がつ……あ……」

首を絞められ、苦しそうにする姫野。

「お前に少し……して貰いたいことがあるんだが……」

筑波は姫野の首を絞めながら、にやりと口角を上げて笑った。

BATTLE 8（後書き）

オリ展開です……原作での空手部の人たちの話は、こうこう形にさせていただきました。
何か気になるところがありましたら、遠慮なくご指摘お願いいたします！

BATTLE9（前書き）

総アクセス数67,000、お気に入り登録数270件突破！
本当にありがとうございます！

……GW中に10万越えたらい記念に何か短編を書こうかしら？

「ああ……お腹いっぱい。さて餡はつと」

「兼一さん、いつもその餡舐めていますわね……それなんですか？」

「ん、ああ、これはチュッパチョップスです」

「…………え？」

「だから、チュッパチョップスです」

昼食を食べ終えた兼一と美羽。食べ終わった兼一は制服のポケットから棒付きの餡を取りだし、口に食わえた。

「……食べます?まだありますよ」

「は、はあ……いただきますですわ」

兼一はポケットから違う餡を取りだし、美羽に渡す。

「……あ、コーラ味ですね」

「ロロロロと餡を舐める美羽。渡された餡はコーラ味だった。

「基本的にコーラ味しか買わないんですよ。他にもソーダとかバナナチョコとかマグロとかコーヒーとか……色々種類があるんですよ」

「へえ～そつなんですの……あれ? ま、マグロ?」

指を折りながら数えて教える兼一。美羽は明らかに飴にしてはダメなものに反応する。

「もう舐めるのが癖になっちゃって……常時ポケットに入つてないと落ち着かないんですよ」

と、苦笑いしながら言つ兼一。ポケットにはまだストックがあるようだ。

「…………ん? あれば」

「ほえ? ……あ、たしか同じクラスの姫野さんですか」

兼一と美羽はこちらこむかつて歩いてくる姫野に気付いた。姫野は俯き、右手で首を押させていた。

「ねえ白浜……ちょっと一緒に来てくれない?」

「え?」

少し離れたところから話しかける姫野。突然の事に氣の抜けた返事をする兼一。

「いいけどなんで?」

「…………少し話したい事があるんだ」

俯いていて顔が見えないが、雰囲気からするに大事な用らしい。

「……分かった。じゃ、ちよつとこいつをまね

「あ、はいですわ。じゃあお弁当箱は教室に運んでおかれますので」

「ありがとうございます。で、姫野さんどこに行くんですか？」

「……屋上。着こなして」

ナツ言つて姫野は後ろをむき、歩き出した。

「…………」

「…………」

黙つて歩く2人。姫野が少し離れて歩いていたため、兼一からは顔が見えない。姫野はさつきから右手で首を押えていた。

「……ねえ？話つて何？」

「……今は言えない。」

「……なんでも？」

「……恥ずかしいからよ

静かな雰囲気に耐えきれず、話しかける兼一。だが姫野はそつけなく答える。

返ってきた返事は、告白する前の女子みたいだが、雰囲気からするに違うだろ？

「……」

兼一は飴を口口口と舐めながら黙つて着いていった。

「…………」

階段を登り、屋上の扉の前に着いた。

姫野は何も言わず、黙つて扉を開けた。

「……連れてきたわ」

「おう、『苦勞』

そこにはいたのは6人の男子生徒、そして……

「早く泉を離して！」

大門寺に腕を掴まれている泉だった。

「…………なるほどね」

兼一はすぐに理解した。おそらく姫野はこの男子生徒に泉を人質にされ、兼一を連れてくるように言われたんだろう。

「……『じめん』」

姫野はポツリと兼一に謝った。

「……泉が捕まって……白浜を連れてこなかつたら泉を殴るつて言
われて……」

ポロポロと泣き出し、その場に崩れ落ちる姫野。コンクリートの
地面上に、1滴の涙が落ちた。

「ひっく……白浜に嘘ついて……いいがで連れてきて……ひっく、
最低だよね……『じめん』……『じめんね』」

泣きながら謝る姫野。眼から涙を流しながら兼一を見た。

「……！」

兼一は姫野の首に手の痕を見つけた。痛々しく青くなつた痣。

「お前が白浜か？」

白浜に話しかける1人の男……筑波だ。

口角を上げて笑いながら聞く筑波。

「……とはお前強いよな？……て、おい！聞いてんのか！？」

「お前、俺の後輩2人を蹴つて佐々木を病院送りにしたんだろ？」

兼一は筑波の言葉に反応せずに姫野に近寄り、姫野の前でしゃがんだ。

「え……あ……」

泣いてる姫野の首にある痣を撫でた後、慰めるように頭をポンポンと軽く叩く。

「く……はふっー。」

驚いて軽く開いた姫野の口に、兼一は食わえていた飴をいきなり入れた。

「……！？」

突然の事に泣くのを止める姫野。口にはコーラの味が広がっていた。

「（か、かかか間接キス！？）」

姫野はあまりの事に戸惑い、間接キスに気付き顔を赤らめた。

「姫野さん」

「あ、ひや、ひやい！」

突然兼一に呼ばれた姫野は驚き、変な返事をする。

「……ちょっと待つってね」

「『ツと微笑みかけ、兼一は筑波の方を見た。

その微笑みにドキッとする姫野。だが、次に見た顔は……

「おい、姫野さんの首を絞めたのはどいつだ？」

怒りに染まつたものだった……

「俺だよ」 兼一の質問に答える筑波。

「……そつか、なら」

右足の爪先を地面に軽くトントンと蹴つた後、鋭い眼差しで筑波を睨む兼一。

「……てめえだけは絶対に許さねえ……」

兼一は吐き捨てるように筑波に言つた。

「ふん……良い目だな。まあ、俺と戦つ前にここからを倒してからだな」

「へへへ……」

「今度こそ絶対ぶっ殺す……！」

筑波の言葉を聞き、4人の男は兼一に立ち塞がるよつて並んだ。

「はん……そんなクソ雑魚なモブキャラ共で勝てると思つてんのか？」

「んだといひあ！！」

「なめやがつて……ぶつ殺す！！」

「も、モブキヤフ……」

「ぶん殴つてやる！！」

兼一の挑発に乗る4人。1人ショックを受けてるようだが、……気にしないでおこう。

「まぢはお前の実力を見せてもうおつかれ……やれ……」

「おおおおおー！」

「おひああああー！」

「モブ……モブつて……」

「死ねやあああー！」

筑波の命令に従い、兼一にむかって走り出した4人。

「おひあーーーあれ？」

「おせえんだよ……」

1人の男が右の正拳突きを兼一に放った。だが、兼一はそれを躱し、後ろに回り込んだ。

「Jの野郎！……へ？」

「……」

後ろから右フックを放ってきた男の攻撃を頭を下げるで躱す兼一。

「しつ！……」

「がつ！……いつて！……」

兼一はその状態で後ろを振り向きながら回し蹴りをし、右フックをしてきた男の両足を蹴った。

両足を蹴られた男はバランスを崩し、後ろに倒れる。

「Jの野郎！……」

「……」

坊主頭の男の右の上段蹴りを上体を後ろに反らしながら躱す兼一。そのままバク転をし、腕の反動でバク宙をした。

「ぐえつ！……」

「ちょっと失礼」

2回空中で回転した後、倒れた男の腹に逆立ちの状態で着地する兼一。

「モブつて言つなあああ……」

そんな状態の兼一にむかって叫びながら走つてくる男。それに続き、坊主頭と残りの1人が殴りかかってきた。

「食らいな……」

兼一は逆立ちのまま両腕を交差した後、手を支点にその場で回転し……

「パーティーテーブルキックコース!!」

周りの男たちに何発も蹴りを浴びせた。

「ぎゃええええ!!」

「ぐはあつ!!」

「ふえつ!!」

「もふつ!!!!」

顔や腹などを蹴られ、吹き飛ぶ3人。腹に乗られた男は、回転する手に腹を捻られ、苦しそうに叫んだ。

「オマケだ……！」

蹴り終えた兼一は肘を曲げ、腕をバネにして高く飛び上がった。

「串焼き《プロショット》!!」

「がつ……はつ……！」

兼一は落下しながらコマのよひに回転し、倒れている男の腹を貫くように右足で踏みつけた。

蹴りの威力に白目をむいて氣絶する男。他の男たちも白目をむいて氣絶していた。

「ほつ……おい、大門寺！ 次はお前が行け！！」

「お、押忍！ ……どけ！ …！」

「きやつ！」

兼一の実力に感心した筑波は大門寺に命令する。大門寺はその命令を聞き、泉を掴んでいた腕を力ずくに押し、泉を突き飛ばした。

突き飛ばされた泉は地面に崩れ落ちた。

「 …！」

それに気付いた兼一は、大門寺にむかって走った。

「見よー！ この筋肉を！ …！ 中学ん時からボディービルのジムに通った
最強の鎧！ 」

大門寺は上半身裸になり、自慢の筋肉を見せつけた。

「俺の名は大門寺！ この筋肉に勝てるかモヤシ野郎！ …！」

「てめえの名前なんか聞いてねえよクソ筋肉達磨……」

走りながら怒鳴る兼一。疾風のような速さで走る兼一は、その勢いのまま飛んだ。

「なつ……」

「トロワヅム
三級……」

いきなり飛んだ兼一に驚く大門寺。兼一は両足を大門寺にむけ……

「挽き肉!^{アシシ}！」

「ぐおおおおお……」

大門寺の体に連続で高速の蹴りを打ち込んだ。

その蹴りの嵐に顔の前に腕をクロスして構え、耐える大門寺。

「 てあつ！」

蹴り終えた兼一は蹴りの反動で高く上に飛び上がった。

「……中々効いたが、俺の筋肉には勝てん……」

「 !」

蹴りを受けきった大門寺は、腕を開いて叫んだ。

身体中に靴の跡が出来ているが、ほとんど無傷のようだ。

「ちつ……だつたら」

あまり効いていない大門寺に舌打ちをし、空中で体勢を立て直した。

「……ふつ！」

体勢を立て直した後、兼一は前方に1回、2回と回転し始めた。重力により、回転しながら落下する兼一。

「無駄無駄無駄あーー俺の筋肉には勝てないぞおおーー」

大門寺はボディービルダーの人^{コンカッセ}がやるポーズを決めながら叫んだ。

「……てめえには、さつきから言おうとしてたんだがな

回転しながら話す兼一。体が回転する度にスピードが上がる。

「なんだあーー？」

回転しながらこちらにむかってくる兼一に答える大門寺。兼一は5回転した後、勢いのまま大門寺にむかって……

「劣化……」

「むつーーー」

「^{コンカッセ}粗碎ーーー」

右の踵を垂直に降り下ろした。

「ぐつ……ぐはあああ……」

危険を察知した大門寺は、頭の上で腕をクロスにし構え、ガードしようとしたが、蹴りの威力に負けて地面に叩きつけられた。

「暑苦しいんだよ、その筋肉」

無事に着地した兼一は、気絶している大門寺に言った。

「……わて、大丈夫？ 泉さん」

「へ！？ あ、うん、大丈夫」

地面に座り込んだままの泉に話しかける兼一。突然話しかけられ驚く泉。

「よかつた……じゃあ、姫野さんのところに行つてくれるかな？」

「あ、はい！」

泉は兼一の言つ通りに姫野のところへ走つていった。

「……後はてめえだけだ」

兼一は筑波の方を睨みながら言つた。

「……ふつ」

筑波はその言葉に口元をにやつかせながら笑つた。

BATTLE 9（後書き）

戦いの描写が難しそうの一（汗）

というか三人称が上手く書けない……文才無くて申し訳無いです……
問題があつましたらいつ指摘やアドバイス等、よろしくお願ひ致します！

BATTLE10（前書き）

総アクセス数80,000越えました！

この調子で行つたらGW中に10万越える気がある（汗）

本当に……皆さんに感謝です。

「…………」

姫野は兼一のアクロバティックな蹴り技を見て、唖然としながら言った。

逆立ちしながら回転して相手を蹴り倒す、嵐のような速さでの連続蹴り。

漫画やアニメでしか見たことの無いような技ばかりだった。

「（泉の気持ちが分かつたわ……）」

姫野は泉がなんで白浜に惚れたのかが分かった気がした。

「（あんな演舞のような蹴りで助けられたら、そりゃあ惚れるよな……それに）」

ちよつと待つてね。

「…………」

姫野は兼一の微笑みを思いだし、顔を赤らめた。

「（ば、ばばばバカ！－な、何思い出してんのよーあ、あんな微笑みなんて……微笑みなんて……）」

てめえだけは絶対に許さねえ！

「…………」

兼一の筑波を睨み付けた時の顔を思い出した姫野。頭からボンッ
と煙が出て、顔がトマトのよつよて赤くな。

「（かひじよかつたなあ……あれ、私のために怒ってくれたんだよ
なあ……男の子の本氣で起しつた顔、初めて見たなあ）」

顔から煙が出るほど顔を赤くする姫野は、飴を口ロロロロと舐めた。

「（そ、そういうえばこの飴あいつの……や、ヤバイヤバイヤバイ！
お、乙女か私はあー？）」

ぱくぱくと鳴る鼓動、姫野は両手で押さえ、ブンブンと頭を
横に振った。

「（い、じんなのただの飴だろおー！？べ、べべ別に大したこと無
いしーいや、美味いけど……って違うーー）」

頭を振るのをやめる姫野。髪の毛がボサボサになり、カチューシ
ヤがずれていた。

「（わ、私は泉の恋の応援をするつて決めたんだからーーつて、誰
に言つて訳してんだあー？……い、これじゃ私が……）」

いまだに真っ赤な顔で兼一を見る姫野。兼一は、大門寺を倒した
後、筑波の前に立っていた。

「（まるで……）」

ドクンドクンと高鳴る鼓動。姫野は胸に手をあて、兼一を見つめ

た。

「（まるで……私が……白浜）」「姫野ちゃん……」ついひやい
……」「

姫野はこちらに走つてくる泉の声に驚き、変な返事をした。

「大丈夫!? 私のために……」「めんね」

「え、あ、うん、大丈夫だよ……無事でよかつた」

泉は心配そうに言つた後、眼を涙で濡らしながら姫野に謝つた。
怪我がない事が分かつた姫野は、安心したように微笑んだ。

「……あれ? 姫野ちゃん、なんか顔赤くない?」

「ふえ! ? あ、赤くないし! 気のせいだし! ……」

「……?」

顔が赤いことに気付く泉、指摘されて焦りながら否定した姫野。

「あ、ほりー白浜が戦つよ! だぞー! 」

姫野は誤魔化すように兼一の方を指差した。

兼一は筑波の前に立ち、右足の爪先でトントンと地面を蹴つてい
た。

……一方、兼一の方はどうぞ。

「残りはてめえだけだな」

地面を軽く蹴った後、筑波を睨み付けながら言った。そして筑波にむかって歩き出した。

「やつぱり……お前強いな。久しぶりに歯(いたえ)がありそうだ」

筑波は「やりと笑いながら指をボキボキと鳴らした。

「こへぞー！」

左手を顎の前にまで上げ、体を半身にする構えをとる筑波。足でステップを踏み、兼一にむかって……

「せーーー！」

右の正拳突きを放つた。

「ふつーーー！」

兼一は正拳突きを左に首を曲げて躱し、そのまま左の上段蹴りを浴びせた。

「つとーあぶねえ」

「ちつ……ねりつーー！」

右の上段蹴りに反応して左腕で防御する筑波。

ガードされた兼一は舌打ちをし、右足を戻してからすぐには、左足で筑波の右足を蹴った。

「おつとおー！」

筑波は兼一の左の下段蹴りをバックステップで躱した。

「ククク……おもしれえ！ やつぱり強いな」

構えを解き、笑い出す筑波。

「ククク……強いやつがいるとほつとけねえんだよ……それが女でも、子どもでも、じじいでもなあ！」

「……」

兼一は筑波の言葉に反応し、ピクリと体が動かした。

「てめえは俺が今まで戦ってきた中で一番強い……期待通りの男だ」

嬉しそうに笑い、右手を握る筑波。

「わあて、続きをしょ「おい、聞いていいか?」……あん?」

顔を俯きながら聞く兼一。兼一の雰囲気が変わった。

「……てめえが今まで戦ってきた中で、女性の人はいるか?」

兼一の纏う気迫が、内に凝縮していくのが分かる。

「……ああ、いるぜ。たしか、キックボクシングだったかな?……
だが、期待はずれだつたな。腹を1発殴つたら泣きながら謝つてき
たよ」

筑波は昔の事を思いだし、兼一の質問に答える。

「ムカついたんで、顔とかボコボコにしてやつたなあ……ククク、
あの時の顔は最高に面白かつた」

「…………」

昔の事で思い出し笑いをする筑波。その笑みは不気味なものだつ
た。

兼一は筑波の言葉に何も言わず、黙つていた。

「……そうか」

ポツリと喋る兼一。纏う気迫は全て内にしまい、気迫とは別の何
かを纏つた。

「…………！」

ゾクリと寒気がする筑波は、反射的に構えた。

兼一は俯きながら制服のポケットに手を入れ、そこから黒い皮の
手袋を出した。

「お前はもつ許さねえ……レティに手を出す奴は」

取り出した黒い皮の手袋をはめ、筑波を睨む兼一。

「俺がぶつ壊す……！」

その眼には、静かなる殺気が籠っていた。

「くつ……な、なんだその手袋はー?..」

「……これはな、俺が本気の時に使つ手袋だ。本気で戦つと、掌が摩擦で擦りむけるんだ」

筑波の質問に丁寧に答える兼一。手袋をはめた右手を握つたり開いたりした。

「料理人は手が命だからな……守つてやらねえと」

「料理人……だと? 武術家じゃないのか?」

「俺は、戦うコソクだ……おい、クソ野郎。なんで俺がこんなにてめえに教えてやつてるか分かるか?」

「……?」

「やりと不敵に笑う兼一。右の拳を筑波にむけ……

「てめえへの真土の土産だよ」

親指を下にしながり書いた。

「てめえ……！ぶつ殺す！！」

兼一の挑発にキレた筑波は、右の正拳突きを放った。

「おせえつーー！」

さつきのように左に首を曲げ躲し、右の上段蹴りを筑波にむけて放つ。

だが、そのスピードまさっきよりも速く、鋭かつた。

「首肉！」
〔コツ〕

「ぐつ……がつ……ーー！」

右の上段蹴りは筑波の喉に当たり、苦しそうにする筑波。

「肩肉！」
〔エポール〕

「ぎつーーーあああああつーー！」

筑波の喉を蹴った右足を伸ばしたまま、肩に踵落としをかました。鈍い音を立てて折れる鎖骨。痛みに耐えきれず叫ぶ筑波。

「背肉！鞍下肉！—」
〔バーク・アッタ・セール〕

「がつーーだつーー！」

筑波の後ろに回り込み、逆立ちをする兼一。腕を交差し、勢いよ

く回転しながら筑波の背中と、背中の下辺り……鞍下を連続で蹴つた。

兼一の掌がコンクリートの地面に擦れる。素手なら砂利で手が血塗れになるほど回転を、手袋が守る。

「ふつ！……ボワトワーヌ胸肉！」

「「」」

腕をバネにし、反動で飛び上がった兼一は、筑波を飛び越えて足から着地。

後ろを振り返りながら左足で筑波の胸の中心を蹴り抜いた。

「もも肉！」

「だつ……」

蹴った左足を地面に着け、左足を支点に筑波の左大腿部を右足で思いきり蹴り抜いた。

筑波は蹴りの威力に右足から崩れ落ちた。

「がつ……あ、……で、でめ、えつ……！」

喉を蹴られた筑波は、声を震わせながらもなんとか立ち上がった。だが、右足がガクガクと震え、生まれたての小鹿のようになっていた。

兼一は蹴り抜いた右足を地面に着き、力を込めた。その後、左足の膝を曲げて体を丸めた。

「……食らえつ！」

筑波に背中をむけた状態で叫ぶ兼一。

右足を力一杯踏みしめ、筑波の腹部に……

「や、や、め、っ……！」

「羊肉ショット《ムートンショット》……！」

強力な左後ろ蹴りを見舞つた。

「」

声にならない声をあげる筑波。メキメキと腹にめり込む兼一の左足。

「……飛べっ！」

兼一が叫んだ瞬間、筑波は勢いよく吹っ飛んだ。
地面上平行に吹つ飛び筑波。

「ふう……」

筑波を蹴り抜いた兼一は、吹つ飛んでいった筑波に背をむけ、一息つきながら手袋を外した。

「 がっ！」

兼一の後ろで網のフェンスに背中からぶつかって止まつた筑波。
そのままズリズリと下に下がり、前のめりに地面に倒れた。

「てめえには、クソ不味い敗北の味がお似合いだ……クソ雑魚
が」

兼一は振り向かないで氣絶した筑波に言つた後、姫野たちのところへ歩いていった。

筑波撃破！！

兼一の連続攻撃を書くのが楽しかつたです（笑）

兼一の手袋の理由はあんな感じです……

達人級なら大丈夫だと思いますが、兼一には厳しいと思い、こういった勝手な設定を作りました（汗）

もし気分を害された方がいらっしゃいましたら、ここで謝ります……

ごめんね（・▽）▽

（・（○=（。▽、'）

BATTLE11（前書き）

GW中に10万アクセス?ははっ、無理に決まってるじゃん!調子にの……10万越えてるぅ!??
というわけで10万越えました。本当、感謝感激です……
読んでいただき、ありがとうございます!

「さて……大丈夫?」

筑波を倒した兼一は、泉と姫野のところまで歩いてきた。

「う、うん! 大丈夫だよ!」

「…………」

地面に座つたまま慌てて返事を返す泉に対して、姫野は黙つたまま俯いていた。

「……姫野さん?」

「……めん」

「……? “めん、聞こえないんだけど……”

心配した兼一は、姫野に話しかける。姫野はまごつと何か言つたが聞こえなかつたため聞き返す兼一。

「……白浜! “めん!」

立ち上がり、兼一に頭を下げて謝る姫野。

「お前を騙すような事して……下手したら怪我しちゃうかもしけなかつたのに……」

「大丈夫だよ！ボク意外と強「それでも！？」……」

兼一の言葉に被せるように叫んだ。

「それでも……危ないだろ？」なのに私は

姫野ちゃん

頭を下げるながら泣き出した姫野を、心配そうな顔で見る泉。

「……だって、そうするしか泉さんの事助けなかつたわけだし、ボクは気にしてないよ」

でも、私は田舎に靈を

「ふう……あのね、姫野さん。」これは、ボクの知り合いの言葉なんだけどね」

強情な姫野にため息をつく兼一は、昔ある人に聞いた言葉を姫野に教えた。

「その人いわく、女の嘘は許すのが男……らしいんだ」

昔教わった事を思いだし、懐かしそうに笑う兼一。

「だから姫野さんのついた嘘を、ボクは許すよ」

۷

にこりと微笑む兼一の笑顔を見た姫野は、ドクンと心臓が高鳴つ

た。

「（ああ、）この笑顔だ……この笑顔はズルいだろ……反則だ）」

さつきまでの怒りの表情ではなく、いつもの笑顔でもない、安心させるような優しい笑顔。

その笑顔を見た瞬間、顔を赤く染める姫野。

「（まいっただなあ……）」

泣き止んだ姫野に安心した兼一は、泉に話しかけていた。
「（口）と笑いながら話す泉。その笑みは、恋する乙女のもの
だった。

「（♪）めん泉。私、あなたの応援できそうに無いわ……」

「姫野さん！保健室に行つて首の怪我を見てもらこに行きましょ
う！」

「わ、分かった！今行く！」

だつて、これからライバルになるからね！

「すぐ治るよひでよかつたね！」

「まつたくだ……」それで痕が残つたら最悪だもんな

あの後保健室に行つた3人。姫野の怪我は、1日もすれば治るひ
しく、湿布を貼るだけですんだ。

今は放課後……泉と姫野は下駄箱の前で靴を履きかえながら話して
いた。

「それで、泉は白浜を誘えたのか?」

「うーーーいや…………その…………」

「まだなのかな?

姫野の質問にどもる泉。姫野はため息をつきながら呆れた。

「だ、大丈夫……明日……明日!」^{「それは絶対……多分」}

「どうちだよ

と、漫才のよひな会話をしながら外に出た。

「…………あ

「…………お

「…………ん?」

外を出ると、兼一が飴を舐めながら立っていた。

「し、ししし白浜君ー。」

「落ち着け泉」

偶然の出会いに焦る泉を冷静に落ち着かせる姫野。

「今から部活?..」

「ああ、そうだよ。白浜は?..」

「ボクは今からバイトだよ」

泉が落ち着くまでの間、兼一と会話する姫野。

「バイト?なにやつてるんだ?」

「喫茶店だよ。喫茶マジHいつていつといろで働いてるんだ

「へえ~じゃあ今度行つていいか?」

「わ、私も!私も行きたい!..」

「うん、いいよ!いつでも大歓迎だ」

仲良く会話する3人……そこに1人の少女が走ってきた。

「兼一さん!お待ちしましたですわあ!」

「あ、美羽さん」

走ってきたのは美羽だった。

「じゃ、帰りましょ。……あら、お話し中でしたか？」

「あ、いや、その……」

「……」

こきなり来た美羽に、惑う泉。黙つて美羽を見つめる姫野。

「……あのセ？風林寺」

「はい、なんですか？」

口を開いた姫野は、美羽に話しかけた。一瞬一瞬と笑いながら返事をする美羽。

「……お前、ひいて、どんな関係なんだ？」

「ほえ？」

2人の関係について質問すると、キョトンとした顔をする美羽。

「……お友達ですか！」

美羽は、満面の笑みで答えた。
その答えにホッとする泉と姫野。

「美羽さん……そろそろバイトが

「あ、すいませんですわ！」

腕時計を見ながら急かす兼一に謝る美羽。

「じゃあ2人共、部活頑張ってね」

「うん！白浜君もバイト頑張ってね」

2人に別れを告げて、兼一と美羽は校門の方へ歩いていった。

「……行っちゃったな」

「……行っちゃったな」

兼一たちがいなくなつた後、気の抜けた会話をする2人。

「……ねえ、姫野ちゃん」

「…………ん～？」

「……負けないからね」

「…………はいっ！？」

泉の突然の負けない宣言を聞き、2、3秒の間の後に驚いて声をあげた。

「な、ななな、何を言つて……！」

「ふふつ……姫野ちゃん顔真っ赤だよ？」

「……！」

泉の言葉を理解した姫野は、顔を真っ赤にした。

「……一緒に頑張ろ！」

「……！」

明るい笑顔で言つた泉……姫野はその笑顔を見てもとに戻つた。

「うん、一緒に頑張ろ！」

つらげて笑う姫野。その笑顔は、とても明るいものだった。

「ふふふつ」

「はははつ」

一緒に笑う2人。この瞬間、2人は友達から親友に変わり、そして恋のライバルになつた。

「……といつか、まずは風林寺さんをどうにかしないと」

「あ……か、勝てる気がしない」

2人仲良く頭をガクッと下げる。

そのまま2人は自分の部活動があるため、トボトボと歩いていつた。

「くしゅん！」

「美羽さん……風邪ですか？」

「ふえ……分かりませんですわ……」

BATTLE11（後書き）

はい、2人目落としました。

今回は今までにないぐらい出来の悪いものですね……
姫野の性格が分からん……

アドバイスお願い致します（泣）

10万越えたので、短編小説を書きます！

本当にありがとうございました！

HINTERVAL 1 (前書き)

と、いうわけで短編です。

10万アクセス突破記念です！前々から書きたかったんですね（笑）

これからHINTERVALと書つのは短編、BATTLEが本編になります！

それではどうぞ！

INTERVAL 1

「はあ……暇だなあ」

とある休日の午後、兼一は家でソファーに座りながらボーッとしていた。

昼食も食べ終わり、皿洗いもしたし、掃除もしたし、洗濯物も干した。

家事のすべてを終えた兼一は、手持ちふさたな状態だった。

「暇だなあ……今日はバイトも無いし……はあ～」

ため息をついてソファーに横たわる兼一。

だが、眠いわけでもなく、ただただ天井を見つめた。

「……テレビでも見るか」

テーブルの上にあるリモコンを取り、テレビのスイッチをつけた……

「……の天気は晴れ、絶好のお出かけ日和でしょうーそれでは、美人天気予報士！ナナミさんのお天気コーナーでした！」

「……次」

チャンネルを変えた。

「……今日未明、戦隊ヒーローで有名なソゲキさんが詐欺容疑で逮捕されました。ソゲキさんは容疑を否認し……」

「……次

チャンネルを変えた。

「……大食い王決定戦、優勝は、猿山さんです！」

「おおおおー大食い王に、俺はなるーー！」

「……いや、もう大食い王ですよ？」

「ん……ああ、そうか」

「……つ～～ぎ～～」

チャンネルを変えた。

「……さあ、始まりました第02回剣道世界大会決勝！日本人代表、謎の縁の二刀流剣士は世界一を取れるのか！」

「……つ～～ぎ～～」

チャンネルを変えた。

「……華道の名人、ロビン・二小山が送る、正しい礼儀作法の時間
が始まりました」

「……次

チャンネルを変えた。

「……スーパー…ビッグだい」の肉体!」

「まあ、スゴいわ!でもこきなりビッグしてこんなにマッチョになつたのかしら!教えてフランク!」

「はははっ!しようがないなあカティはーこれはね、この二つの効果を!」

「いらね……といつか何で海パン?……次

チャンネルを変えた。

「……大発見です!海底深くの沈没船の中から、アフロヘアーの骸骨が発見されました!」

「どんな骸骨だよ……はあ、面白い番組無いなあ

兼一はテレビを電源を切つたり、ソファーに寝転びながら伸びをする。

「……そりだ、梁山泊に行こう!」

まるで京都に行くようなノリで起き上がる兼一。すぐに梁山泊に行く準備始めた……

INTERVAL 1（後書き）

いかがでしたか？笑えていただければありがたいです！

今回の短編で、いくつかの伏線を張りました……気付いた人がいたら、本当に驚きです（汗）

なんか、書くのがすごい楽しかったです……一時間もかからず書いてしまった。

それでは、次の短編は15万アクセスの時に！

何かリクエストがありましたら、感想でリクエストを書いてください。

気に入ったのがあれば書きますので……

BATTLE 12 (前書き)

ここから本編です。

今回から段々とシリアス(?)になつていきます……

ご指摘を受けたので、書き方を変えました！
アドバイスありがとうございます！

「よいしょっと……」

とある休日……兼一は黒いワイシャツを着て、首もとにトレーデマークの太極バッジを付けていた。

兼一は靴を履いて家の玄関を開けた。外に出ると、天気予報通り青空が広がっていた。

「……いい天気だなあ」

背伸びして深呼吸する兼一。その首もとには、太陽の光に反射してキラリと光る銀色の口ケットペンダントがあつた。

「これでよし……」

兼一は玄関の鍵を閉め、ポストの中を覗く。

「……はあ……」

何も入っていないポストを見てため息をついた。

「さて、行きますか」

兼一は気を取り直して梁山泊にむかって歩き出した。

「……お、も、い……！」

梁山泊に着いた兼一は、重い正門を力一杯押していた。少しずつだが開いていく正門。そのスピードはゆっくりだった。

「い、ん、ち、く、しょ、うが、あ、あ！」

兼一は中々開かない正門にキレ、正門から離れた。…………そして。

「猛進……」

助走をつけた兼一は、正門にむかって……

「猪鍋シュー、トおおおーーー！」

飛びけりを放った。

「うつせえぞ！ 誰だーー？」

「へ？」

蹴り抜く前に開かれる正門、止まれない兼一は門を通り抜け……

「へふつーー！」

門の先の灯籠に勢いよく激突した。

「失礼しました……」

灯籠に激突した兼一は、門を開けた逆鬼と共に道場に歩いていた。

「まつたく……少しは近所迷惑とか考えねえのか？」

喧嘩100段、逆鬼至緒！

「すいません、逆鬼さん」

「くつー！」

と、会話しながら歩く2人。そして2人は道場に着いた。

「じんにじちは、岬越寺さん」

「ああ、兼一君じんにじちは」

哲學する柔術家、岬越寺秋雨！

「あぱつー、兼一よー！」

「アパチャイさんー、じんにじちは」

「あぱぱー！」

裏ムエタイ界の死神、アパチャイ・ホパチャイ！

「おお、兼ちゃん久しづつね」

あらゆる中国拳法の使い手、馬剣星！

「あれ？……じぐれさんは？」

「うう……！」

「うわあつーな、なんで天井にぶら下がってるんですかー…」

剣と兵器の申し子、香坂じぐれ！

「まつほ、兼ちゃん。よく来たの」

梁山泊を纏める長老。

「皆さんお揃いで……」

梁山泊にいる達人たちは、全員道場にいた。

「あれ？ 美羽さんは……」

「美羽なら今日は部活らしいね……多分5時頃帰ってくる感じかな？」

「やつですか……」

兼一の質問に石を削りながら答える秋雨。

今は4時なので、後1時間程で美羽が部活から帰ってくるらしい。

「あぱぱー、兼一、今日は何しに来たのかよ?」

煎餅を食べながら聞くアパチャイ。

「今日はですね……岬越寺さんにお話が

「む、私かね?」

アパチャイの問いかけに答えた兼一は、秋雨に話しかけた。

「はい……ボクの師匠について聞きたに来ました

「…………」

石を削るのを止める秋雨。

「ああ、戦う料理人だつたか? お前、本当にそいつの弟子なのか?
?」

「はい、その通りです。ボクの武術と料理の師匠です

「ほひ、料理もね? といつことは兼ちゃんは料理も凄いね?」

「凄いって訳じやないですか? まあ、自信はありますよ」

逆鬼と馬の質問に答える兼一。

「…………すまないがみんな、少し席をはずしてくれないか?」

「あん? なんでだよ?」

「……頼む」

石を削る手を止めて黙っていた秋雨は、突然全員にこの場から出るよう言った。

「まあ、まあ……！」は秋雨さんの言つ通りにするね

「…………」

そう言つてから馬は道場から出た。それに続くよつに黙つていなぐなるしぐれ。

「ちひ、わあつたよ……行くぞアパチャイ！」

「あは……」

秋雨の言つ通りにいなくなる逆鬼とアパチャイ。

「さて……ではわしも……」

最後に長老が道場から出た。

途端に静かになる道場。兼一は秋雨の近くに正座した。

「……兼一君。君の師匠とは、2年前に会つたと……前に言つたね

？」

突然話し出す秋雨。その問い合わせる顔く兼一。

「……あれは今みたいな暖かい春の事だつた……私は少し用事があ

つて海の方に行っていたんだ。」

「そこはとても綺麗な場所だった。活気溢れる港町で元気に遊ぶ子供たちがいた……平和なところだったよ」

思い出すよつた話す秋雨の顔は、懐かしそうだった。

「私がフЛАリと歩いていると、港町から離れたところに診療所があったんだ」

「その診療所に行くと、いい香りがしてね。そこを訪ねてみた……」

ああ？ 誰だお前？

「そこにいたのが、君の師匠……戦う料理人だよ」

いや、いい香りがしたものでね……思わず立ち寄ってしまったんだ。

そうか……あんたも食べるか？

いいのかい？ 見ず知らずの男に……

いいんだよ別に！ ほら入れ！

「彼は見ず知らずの私に料理を振る舞ってくれた……私はあんなに美味しいオムライスは初めてだつたな」

ほう、オムライスだったのか……では、お言葉に甘えて。

う、美味い……

ふつ……まあ、遠慮せずに食べててくれ。

ああ、ありがと。……これは君が作ったのかい？

ああ、そうだぜ。いけるだろ？

「彼は煙草を吸いながら、嬉しそうに笑っていた」

「はは、師匠らしくいや」

兼一は容易にその光景が目に浮かんで思わず笑った。

美味しかった……ありがと。

お礼なんざいりねえよ。

一つ聞いていいかい？

おう、なんだ？

君は、武術家かい？

……へえ、分かるのか？

まあ、雰囲気でね。しかも君は、達人級だね？

まあな……だけどこんななりじやあ、もつ達人なんて言えねえ

な……

「…………そつ言つた彼の身体には」

「右足と左目が無かつたんだ」

「――――」

残酷な事実を話す秋雨に驚く兼一。

「しかも…………聞くと彼はもう長くないらしい」

ま、仕方ないだる……ダメなもんはしようがないぞ。

医者は……なんだって?

もつて1週間だとよ……

どうじてそんな状態に?

「やう聞くと彼は、戦った時に右足と左目を失い、その時に毒を食らつたと話していた」

「…………」

あまりの事に言葉を失う兼一。秋雨は話を続けた。

「怪我をしたのはそこから1年前で、今まで頑張っていたが……もうダメらしい」

あんたが気にすることじやないさ……

「彼は笑っていたが、顔が青かった……」

さて、食つたならもつ行つてくれ！ 最後にあんたみたいない人に料理を作れてよかつたよ。

「……無理して料理をしたんだろう……フフフフだつた」

大丈夫かね！？

おお、大丈夫大丈夫！ ちょっと眩まぶがしてな……ったく、煙草吸つただけでこうなるなんてな……

そんな体でそんな物を吸うんじゃない！ 早くベッドに……

了解了解！ じゃ、俺は寝るから……

ならいいが……オムライスをありがと。なにかお礼がしたいのだが……

いらねえ……と言いたいところだが、少しお願いしたいことがあるんだ。

もし、俺の弟子になつたら……

「その後彼は奥の部屋に行つてしまつた」

「……それで、師匠はなんど？」

「すまなかつた……そつ伝えて欲しいと言われた」

「…………」

師匠の伝言を聞いて俯きながら黙る兼一。

「…………その一週間後、風の噂で聞いたんだが……彼は「くなつたら
しー」

「…………」

話終えた秋雨はそのまま黙つてしまつた。
静かになる道場……カチ「チ」と時計の針の音が響く。

「……実は、ですね」

俯きながら兼一は秋雨に言った。

「……実は、そういうやないかとは思つていました」

ポツリポツリと話始める兼一。

「師匠は、いつもボクに手紙を送つていました……ですが、3年前から一向に手紙が来なくなつて……」

俯き、右手をギュッと握る兼一。

「……最後に来た手紙には、海が見える診療所の写真が入つてしまつた」

その診療所が、さつき秋雨が話していたところのようだ。

「……なんとなく……そんな気はしてたんですね……」

「……」

苦笑しながら話す兼一。黙つて聞く秋雨。

「……師匠は、昔ボクを助けてくれたんです」

おい、大丈夫かクソガキ。

「ボクに武術を教えてくれて……」

はい、後10分。

「料理を教えてくれて……」

違つ違つ！ 白ワインはもう少し後だ！

「そして……」

おい、クソガキ！ いつちに来いよ！

「そして……『僕』を『ボク』に変えてくれました……」

物語は、昔に遡る……

BATTLE 12（後書き）

次からは兼一の過去編です。

伏線を回収出来るように頑張ります！

BATTLE13（前書き）

もう16万アクセス突破してたwww
早い、早いよwww
いざれ短編書きます。

今回から過去編です。少々残酷な表現がありますので、ご注意願います。

それは、10年前のじわじわと暑い夏の1日でした……

引っ越ししてきて初めての夏休み、ボクは家族と一緒に旅行に行きました。

「楽しかったね！　お兄ちゃん！」

「うそ、やうだね！　お父さん、また遊園地行きたい！」

「ははは、またたく間に遊園地が好きだなー！」

「ふふふ、また行きましょうね」

「うんー、あ、お母さんー、またお弁当作ってねー！」

「分かったわ。また兼一の好きな卵焼き作るわね」

「やつたあー！　僕、お母さんの卵焼き好きー！」

「あ、ほのかもー、ほのかも卵焼き好きー！」

「あひあひ！」

「たしかに母さんが作る卵焼きは絶品だからなー！」

お父さんとお母さん、そして妹のほのかと一緒に遊園地に遊びに行つたんですね。

すいじく楽しくて……車の中やすうとせじゅいでした。あの頃は楽しかったなあ……

……そんな楽しい時に、事件は起きました。

「なつーーー！」

「え？」

反対車線からボクが乗っていた車にトラックが突っ込んできました。

最後に見たのは……田の前から迫ってくるトラックでした。

「…………あれ？…………！」

ボクが気づいた時には、病室でした。

「…………お母さん？　お父さん？　ほか？…………いつーーー！」

状況が飲み込めなくて、家族を探そうとしましたが、痛くて動けませんでした。

「あれ？…………なんで？」

ボクの上半身には、包帯が巻かれていました。

「あー……せ、先生！　兼一君が田を覚ましました！」

部屋に入ってきた看護婦さんは、医者を連れてきました。

「田を覚ましたんだね？」 兼一君

「おじさん、誰？」

「私はお医者さんだよ。君は救急車でここに運ばれてきたんだ

「え？……どうして？」

「……覚えて、無いのかい？」

その時、ボクの頭の中でトラックが突っ込んできた時の光景が
[写]し出されました。

「……！…… そうだ！ と、トラックが……トラックが……」

「落ち着いて！ 頼は事故の後ここに運ばれてきて、すぐに手術を
したんだ。そして君は3日間寝ていたんだよ」

「……お父さんは？ お母さんは？ ほかは…？ みんな無事な
んだよね…？」

「……兼一君、君に連れていきたいところがあるんだ」

そつまつて医者は、ボクを車椅子に乗せてある部屋に連れてい
きました。

「え？」

その部屋には、ベッドに寝かされた3人がいました。

「お、とつせん……おかあ、さん……ほの、か?」

「…………君の家族だが、運ばれてすぐに亡くなってしまった……最善は尽くしたんだけど、当たりどころが悪かったらしく」

「…………み、んな」

3人の遺体は、とても死んだようには見えませんでした。

「…………すまない…………本当に、すまない…………」

「…………」

ボクは信じられなかった……あんなに綺麗なのに、死んでるんだってことが……

「…………」

「け、兼一君……」

ボクは車椅子から立とうとして、倒れました。それでも、床を這いながら3人のところまで行きました。

「う、うわでしょ?……うそなんでしょ?」

背中から血が出て、包帯が赤く滲みました。痛くても、辛くても、3人のところまで必死に這いました。

「いっ……がつ……ねえ、僕もうわがまま言わないから……田
を覚ましてよ……」

誰も返事を返してくれませんでした……何度も呼び掛けても……
何度も、何度も、ナンドモ……

「う、あ……ああ……あああああアアアアアア……」

叫んだ後、ボクは氣絶しました。起きたら、またいつものような普通な暮らしが待つてると願いながら……無理な、願いをしながら……

神様に何度もお願ひしました。みんなを生き返らせてくれって……

神様を何度も罵倒しました。なぜボクだけ生き残った……なぜボクだけ死ななかつた……なぜ……僕だけが、なんで……なんのためにして……

その時、ボクの中で、何かが、砕けました。

「…………」

それからしばらくして、家族の葬式をしました。親戚が葬式を仕切ってくれたんです。

「あの子が例の？」

「そうそう……可哀想よね……一人になっちゃって」

「しかも預かる人いないんでしょ？」

ボクを預かってくれる人は誰もいませんでした……みんなボクを腫れ物のように扱い、誰もボクを見ようとしませんでした……

身寄りのないボクは、孤児院に預けられました。

そこで待ち受けていたのは、壮絶な苛めでした。

「てめえ！ キモいんだよ！！」

「いつも笑わないしょー！ 僕たちのことバカにしてんのか！？」

「…………」

ボクは家族を失ったショックで感情が無くなってしましました。

笑うことも泣くこともせず、それが気に食わないと他の孤児院の子どもに苛められました。

それを孤児院の先生は見て見ないふりをしてました。

食事の時にご飯を捨てられました。

寝る前に腹を何発も殴られました。

トイレの水を飲まされたこともありました……

「…………僕は…………」

それでも、ボクは何も言いませんでした。反抗するわけでもなく、ただただされるがままでした。

「…………僕は…………なんのために…………」

それから月日が流れ、ボクはある日、公園にいました。

「僕は…………なんのために生きているの?」

「…………おなか……すいたな…………」

朝食も、昼食も食べていらないボクは、空腹を我慢しながらベンチに座つていました。

「…………おなかすいた…………」

空をボーッと眺めて、空腹に耐えていた……そんな時。

「くっそ…………マジムカつくー!」

「荒れてるねえ…………落ち着きなよ」

2人の不良が歩いてきました。

「ああああー……むしゃくしゃするーーー……くっそ…………誰かいねえか…………おー!」

2人の不良の一人、スキンヘッドの男がボクに近付いてきました。

「おーガキ…………あの孤児院の子どもだな?」

「…………」

「ちつ……だんまりか……まあ、いいや!……ちよつといひつからいー!」

ボクはその男に連れられ、公園の森の中に入りました。

「おこ、ちやんと見張つとけよ。」

「はこねー……」ウサギちゃん、あんまつやすぎんなよ。」

「分かってる……おいガキ。俺は今非常にムカついてる。だから殴らせいやー。」

「ぐつーーー！」

スキンヘッドはこきなりボクの右頬を殴りました。

「……まだまだだぜ？ わりつー。」

「がつーーー！」

スキンヘッドは無理矢理立たせて何度も殴りました。

「わりつー。わりつー。」

「がつーーー。ぶはつー。」

顔や腹を何発も殴つたり蹴つたり……

「はあ、はあ、はあ……」こつ、中々しぶといな

「……」

顔が腫れて、口や鼻から血が出ていました。腹を殴られて胃液を吐き出しつて地面を濡らしました。

それでも、一切涙は出ませんでした。

「……なんだその田？ ムカつくなつー」

「 がああつー」

「ちゅーー。『わがやんやつわー。』

「ハセーー。」

スキンヘッドはポケットからバタフライナイフを取りだし、ボクの左田の下を切り裂きました。

血がドバードバと出で、ジンジンと田が熱くなりました。

「こいつのこいつー ムカつくから抉つてやるーー。」

「死ぬつてー それ以上はマズイー！」

「いいんだよーー。どうせこいつには親がいないんだーー。死んだつて別に関係ねえだろーー。」

そう言つてボクにナイフを振りかぶりました。

「（僕、こじで死ぬのかな？ こじで死ねば、みんなこ……）」

ボクは諦めました。むしろ死にたい、そう思つてこました。

「（お父さん、お母さん、ほのか……今、行くよ）」

降り下ろされたナイフ。ボクは田を開きました。

「（……でも、なんでかな？……僕、まだ……）」

でも、ナイフがボクを切り裂く瞬間……

「しにたくなー……」

「あやああああ……ひ、腕がああー！？」

スキンヘッドの叫び声が聞こえました。

「…………え？」

その叫び声に、ボクは思わず田を開きました。

「つたく……ガキ相手に向じてやがる……」

田の前には腕を押されるスキンヘッドと……

「ふー……クソ雑魚が」

タバコを吸っている、金髪のヒーローがいました。

BATTLE 13 (後書き)

過去編は2回に分けます。

BATTLE 14 (前書き)

過去編はこれでおしまいです。

俺にはこれが限界だ……

BATTLE 14

その出来事には、奇跡のようなものでした……

「て、てめえ……誰だ！？」

「俺か……やうだな、通りすがつのロックさんだ」

「なめやがつてえ……」

スキンヘッドはその金髪の男性にナイフを刺そりました。

「まったく……マナーがなつてねえな

「なつー？」

「これでも食らひつてる……」

金髪の男性はスキンヘッドの攻撃を避けて、懐に入りました。
その動きは滑らかで、無駄があれませんでした。

「反行儀キックコース《アンチマナーキックコース》！」

「ぐつはあああ……」

男性はスキンヘッドを下から上に垂直に蹴り、上に蹴り飛ばしました。

「……デザートはいらねえか

「 がふう！」

「 ジ、」「わねやんー？」

「 おい、てめえ……そいつを連れて消えろ」

「 は、はいいー！」

そのまま不良たちは退散してしまいました。

「 ふー……おい、坊主。大丈夫か？」

「 ……あり、がとう」

「 礼なんざいらねえよ」

金髪の男性は煙草を吸いながら立ち去りつとしていましたが、
その時ボクのお腹が鳴つてしまいまして……

「 あん？ 坊主、腹へつてんのか？」

「 ……大丈夫、慣れてるもん」

「 ……あつ、ちよつと来い」

金髪の男性はボクを連れて公園のベンチに座らせました。

「 坊主、これ食え」

「……！」

渡したのはラップに包まれたオーギリでした。海苔もついていない、白いオーギリ……

「……いいの？」

「ガキがいちいち気にすんな」

「……いただきます」

ボクは一口、オーギリを食べました。

「……！」

塩がかかつた、何も入つてないただの塩オーギリ。それでも……

「お、い……しい」

スゴく美味しかった……今まで食べた事が無いぐらい美味しかった……

「う、あ……ああ」

その美味しさに、涙が出ました。家族の葬式でも、苛められても、殴られても……一切泣かなかつたボクが、オーギリを食べただけでボロボロと涙が出ました。

「つめえだろ?」

「うん、うんー！ 美味しい。ひっく。美味しいよお。

「へつ……泣いてねえで食べなさい

「わいふへんせんせんじふわいふへんせんせんじふ」

1個のオーロリを1時間かけて食べました。味わつよつて、や
っくじと……

卷之三

金髪の男性は、曇つた空を眺めながら、静かに煙草をふかしてそばにいてくれました。

「……………ありがとう、美味しかった」

「だから、礼はいらねえよ」

食べ終えて、泣き止んだボクは、金髪の男性にお礼を言いました。

「これ付けてろ」

「……絆創膏？」

渡されたのは絆創膏でした。ボクはそれを左目の中の傷に張り付けました。

「……坊主、お前親は？」

「……去年、みんな死んじやつた……今は孤児院で暮らしてる」

「……なんで殴られてたんだ？」

「分かんない……ムカついたからって言つてた。でも、殴られるの慣れてるから」

「……なんで腹が減つてたんだ？」

「……苛められてて、ご飯は全部捨てられてた」

「…………そつか」

金髪の男性はボクに色々聞いて、ボクはその全ての問いかに答えました。

「なんで、やり返さねえんだ？」

「……僕、弱いから……体も喧嘩も弱いし……だからやれるがままでしか方法が無いんだ」

「……悔しくねえのか？」

「……弱い人間は、耐えるか逃げるしかないんだ……」

「逃げる……ねえ」

金髪の男性は、煙草をポケットから取り出した携帯灰皿で消して、立ち上りました。

「おい、クソガキ……お前、弱い奴がいつも逃げてると思つているのか？」

突然尋ねた男性……ボクはその問いに答えました。

「だつて、そうでしょ？ 弱い人はいつも虜められて、独りぼっちで、逃げ回つてるでしょ？」

「ふんつ、ちげえよ……人は誰だつてなあ、牙を持つてるもんだ……」

…

「きば？」

「おお、牙だ。弱い奴はその牙の使い方が分からなかつたり、使つても勝てないつて思つてんだ……」

「……」

ボクは考えました。じゃあどうすればいいんだ？ ボクはどうすれば……こんな地獄から解放されるんだたつて。

「……なら、どうすればいいの？ どうすれば強くなれるの？」

ボクは答えが出ず、男性に問いました。

「簡単だ、牙を研げばいい。長い年月をかけて、丁寧に鋭く研ぐの
だ」

男性は不敵な笑みで答えました。

「……研ぐまでに時間がかかるよ？ その間どうすればいいの？」

「ああ？ そんなの決まつてんじやねえか。逃げればいいんだよ」

新しい煙草を吸いながら答えた男性……でも、ボクはその答えにガッカリしました。

「結局逃げるじゃん……」

「はあ……だからあ、ただ逃げるんじやねえよ……」

呆れたように頭を横に振っていました。その態度に少しムツとしたボクは、反論しようとしたしました。

「何がなんでも生き延びて、泥を啜りながら逃げて、それでも牙を研いで……」

「……」

でもボクは、反論しませんでした……いや、反論できませんでした。

「最終的には……」

雲の切れ間から、太陽の光が漏れました。

「弱い奴でも……」

太陽の光が男性を照らしました……煙草を口に食わえ、不敵な笑みを浮かべ、ポケットに手を入れながら……

「逃げずに戦えるぞー！」

男性はボクに言いました……

「…………！」

その瞬間、ボクの中で何かが戻つていい音がしました。

「…………僕でも…………強く、なれますか？」

「なれる…………まあ、その為には勇気と信念と根性が必要なんだがな

…………」

「おい、クソガキどつする？ 弱いまま逃げるか？ それとも…………」

「俺と一緒に、牙を研ぐために逃げるか？」

「 ！」

ボクは気付きました。ボクは誰かに助けて欲しかった……手を差し伸べて欲しかった……つて。

「……つよべ、なりたい……」

ボクは、心に決めました。

「あん？ 聞こえねえな」

「……強く、なりたい……！」

ボクは……

「聞こえねえなあ！――」

「

ボクを助けてくれた、金髪の強いヒーローみたいな……

見ず知らずな他人に「飯をくれる、優しいコツクさんのような

優しくて強くてかっこいい……

「 強くなりたい！――！」

「の男性のようになら……」

BATTLE 14（後書き）

と、言つ感じです。

次回から現在に戻ります。

感動していただければ、嬉しいです。

BATTLE 15（前書き）

今までで一番長いです。

何を伝えたいのかが分からぬかもしません（泣）

「……これがボクと師匠の出会いでした」

昔の話を終えた兼一は、下を俯いたまま秋雨に言った。

「……」

黙つて話を聞いていた秋雨。静かな道場に時計のボーンという音が響く。

「それからボクは孤児院を出ました。その後はずつと師匠に着いていき、武術と料理を教わりました」

兼一は昔を思いだし、くすりと笑った。

「武術の才能が無いボクは、必死に修行しました。何日も、何カ月も、何年も……辛かつたけど、それ以上に楽しかった」

思い出すのは修行の日々……怒られたり、蹴られたり、褒められたりな思いで。そのすべてが宝物のように煌めいていた。

「……師匠が働いていたバラティエで料理の修行をしました。気性が荒いけど気の合う仲間たち、色々助言してくれたじいちゃん……」

移動レストラン『バラティエ』……世界中をトラックと5台のキッチンピングカーで移動し、色んな場所で料理を振る舞うレストラン。従業員はみんな気性が荒く、レストランをクビになつた荒くれ者が多くつた。だが普通の料理人に比べ、料理に対する愛情が素晴

らしかつた従業員たち。

そしてバラティエのオーナー、師匠の師匠……つまり兼一の大師匠は、兼一に色々と教え、兼一はじいちゃんと呼んでいる。

「そんなバラティエを師匠はボクの為に辞めて、この場所でボクを育ててくれました」

兼一の師匠は長年勤めていたバラティエを兼一の為に辞めるとオーナーに言つていた。

土下座までしてオーナーに言つた師匠……その光景をいまだに兼一は忘れなかつた。

「ボクの為に実家を親戚から取り戻し、ボクを養子にして育ててくれました」

奪われていた実家……師匠はその実家を売ろうとしていた親戚に頼み込んで取り返し、兼一を養子にした。

「……嬉しかつた……師匠はボクに料理や武術だけでなく、生き方も教えてくれました」

女性は大切にしろ、戦いでは手を使うな、腹が減っている奴には敵でも飯を食わせろ……多くの教えを兼一は思い出していた。

「……そんなある日、師匠は突然旅に出ると言いました

忘れもしない5年前の秋、師匠は突然兼一に旅に出ると告げた。

「理由を聞くと、世界中の女性が俺を待つていて……って言つてましたが、すぐに嘘だと分かりました」

そう告げてから旅に出る師匠……大きいトランクケースを持って兼一のもとから去つていった。

「……それからは一人で修行しました。1ヶ月に1度送られてくる手紙には、修行方法が書かれていて、その通りにしてきました」送られてくる手紙には、バカ弟子へと始まる文面と、修行方法。そして、「写真だつた」。

「ボクは送られてくる修行方法の2倍のメニューをこなしました。早く強くなりたい……その一心で」

ただでさえキツイメニューを2倍で行つ兼一。ただひたむきに、愚直に修行をこなしていた。

「才能が無いボクには、人一倍努力が必要でした……だから必死にやりました」

春の日には暖かい木漏れ日を浴びながらの修行。
夏の日には炎天下の中汗を滝のように流しながらの修行。
秋には紅葉を踏みしめながらの修行。
冬には氷点下の中での修行。
来る日も来る日も、毎日修行をした兼一。

「でも、ボクには圧倒的に実践経験が少なかつたんです。だから、14歳になつてすぐにバイトを始めました」

「……バイトとは?」

黙つて聞いてた秋雨は、兼一に質問をした。

「……表向きは喫茶店ですが、裏では護り屋という用心棒みたいな事をしていました」

喫茶マツエ……表向きは普通の喫茶店だが、裏ではその筋では有名な、護り屋をしていた。

喫茶店のマスター、松江は戦いこそ出来ないが、人を見る目だけは達人級だった。

松江の目にかかった兼一は、スカウトされた。

「そこからは喫茶店の仕事をしながら、たまに入ってくる裏の仕事をしていました」

たまにかかる電話は、裏の仕事の依頼だった。

仕事の内容は、店に迷惑をかける不良の退治や、要人の護衛、マフィアの殲滅等々、危険なものばかりだった。

「一度死にかけた事もありますし、大怪我をしたこともあります……それでも、ボクは強くなれた」

腹を刺された事もあった、銃撃戦の中での戦いもあった、準達人級の相手とも戦つたこともある……

「そんな毎日を過ごしていた時、師匠から1通の手紙が届きました

届いた手紙はいつも通りのバカ弟子へと始まる文面、だが修行内容は書いておらず、小さい箱を開けると書いてあった。

「一緒に届いた箱に入っていたのは、このペンダントでした」

兼一は首から口ケット・ペンダントを取りだし、蓋を開いた。

そこに入っていたのは、昔撮った家族写真だつた。

「師匠はボクの誕生日を覚えていて、プレゼントにこれをくれました」

キラリと光る銀色、蓋の中心に刻まれた十字架の装飾。

「……このペンダントと手紙が最後で、それ以降は手紙が来なくなりました……」

兼一は天井を見上げた。

「……生きていて欲しいと思いました。でも、心のどこかでもう死んでるんじゃないかつて……」

田をギュッと瞑り、涙をこらえる兼一。

「……ボクの師匠であり、目標であり、夢だった……そんな大切な人は……」

そこから兼一は、黙ってしまった。秋雨はそんな兼一をジッと見つめる。

「……彼は、戦いで重症を負つた……いわば、誰かと戦つたことになる……」

秋雨はボソッと言つた。

「で、君はどうしたい？　彼の敵をとるかい？」

兼一に質問をする秋雨。兼一は田を暝りながら天井を見上げながら考えた。

「ただいま帰りましたわ～」

一方その頃、美羽は染山泊に帰ってきた。

「IJの靴……兼一さんがいらしてるんですねー！」

玄関に置いてあつた兼一の靴を見て、嬉しそうに道場にむかう美羽。

「ちょっと待て美羽

「ほえ？」

道場の廊下に立っていた逆鬼は、美羽を止めた。

「今道場には行くな……」

「な、なんですか？」

「今兼一は秋雨と話している……邪魔すんな」

逆鬼は道場をチラッと見ながら答える。

「じゃあお話を終わった後に」……」

「……いや、もう少し待つてやれ。それまで部屋にいり」

「……？ 終わった後じゃダメですか？」

美羽は首を傾げながら逆鬼に言った。

「……いいか美羽。男には、女にや見せたくねえ顔つてのがあるんだ……兼一の事を思うなら、しばらくしてから会つてやれ」

「はあ？ そうなんですか……分かりましたですわ」

逆鬼の言葉を不思議に思いながら、美羽は自室に行つた。

「あはは……逆鬼は優しいよ」

「うるせえアパチャイ！」

アパチャイの言葉に頬を赤くしながら逆鬼は障子に背中を預けた。

「ボクは……」

道場から聞こえる兼一の声。アパチャイと逆鬼はこいつそり話を聞いていた。

「ボクは……」

話を聞いていたのは2人だけではなく、馬としぐれと長老も聞いていた。

馬と長老は逆鬼たちとは違つ障子から、しぐれは天井裏にいた。

「ボクは、敵討ちはしません。師匠はそんな事を望んだりはしないので……」

兼一は師匠の敵討ちはしないと秋雨に言った。

「それじゃあ、君はこれからどうするんだい？」

「…………」

秋雨の質問され、黙る兼一。

「1人で修行します……今までと同じよつて

「1人で修行なんてたかが知れているよ……それじゃあ君は「じやあどうすればいいんですか！！！」

秋雨の言葉を遮るよつて怒鳴る兼一。兼一は畳をおもいつきり殴り、俯いた。

「師匠がいない今！ ボクは1人でも強くななくちゃいけない！ ！ それが無謀でも、無茶でも、たかが知れている事でも！ そうしなくちゃいけないじゃないか！ ！」

今までの感情が溢れるよつて叫ぶ兼一。

「だからー、師匠がいなくてもボクは戦い続けるー。そつないと……師匠のよつてなれない……ー」

兼一は師匠がない間、ずっと1人だつた。修行の時も、戦いの時も、生活も……ただ、幼い時は違い、兼一には武術と料理があつた。

この2つを極める事、極める事によって師匠に近づける、目標に夢に近づける、それが今まで兼一を支えてきた。だが、その目標は、もう……。

「……君の夢はなんだい?」

突然質問する秋雨。

「強くなつて、師匠のようになる事……です」

「……強くなるだけが、彼になれる事かい? それが本当に君の夢かね?」

秋雨は少し間を開けた。そして……

「……君の夢は師匠のようになつて終わりかい?」

「……」

秋雨の言つた言葉にハッとする兼一。

「……そうだ……ボクは、師匠になつて終わりじゃない……」

思い出すのは、初めて会つた時の事……

「師匠のよつに強くなつて……」

空腹の兼一にオーギリを渡す師匠。

「師匠のよつに料理が上手くなつて……」

敵に食事を『』える師匠……

「ボクは……」

「強くて、料理が上手くて優しい……師匠のよつなヒーローになつて、誰かを助けたい……！」

思い出すのは助けてくれた時の事……オーギリをくれた事……
師匠の強さに憧れた、師匠の料理の腕に憧れた、師匠の優しさに憧
れた……

「ボクは師匠のよつになつて終わりじゃない……師匠には憧れてい
た。だけど、ボクの目標なだけだった」

師匠に憧れて、自分の目標にした。だがそれは……

「それは目標であつて、夢ではない……ボクの夢は、師匠がボクを
助けてくれたように、ボクも誰かを助けるヒーローになる事だった」

誰もがボクを見て見ぬふりをした。ボクを苛めた。誰も助けてくれなかつた。

そんな地獄から、師匠は助け出してくれた。

眩しかつた。まるでヒーローのよつだつた。

そんな師匠に憧れた。

そんなヒーローに、なりたかつた。

「ボクは、誰もが見て見ぬふりをするよつな……悪をやつつけて、弱い者を助けるヒーローになりたい……その為に、力が欲しいです！」

兼一の叫びが道場に響き渡つた。

「……兼ちゃん、ちよつといいかの？」

障子を開けて道場に入つてくる長老。

「兼ちゃんは、内弟子と言つてものを知つとるかの？」

「内弟子つて……師のもとで住み込みで修行する事ですよね？」

長老の問いに答える兼一。その答えにニカッと笑いながら髪を撫でる長老。

「兼ちゃん梁山泊に弟子入りし、ここに住んでみんかの？」

「……え？」

長老の言葉に言葉を失つ兼一。

「い、いいんですか？」

「構わんよ！ お主が強くなりたいと願つなり……のうへ。」

「！」

兼一は一度目を瞑り、覚悟を決めた。

「……お願いします！… ボクを強くしてください！…。」

覚悟を決めた兼一は、長老に頭を下げてお願いした。

「おおおお～アパチャイ！… 準備万端よ！…。」

「うわ～…！」

こきなり現れたアパチャイは、手にグローブを付け、両方の拳を合わせていた。

「ちよ、ちよっとアパチャイさん！？」

「おじおいアパチャイ、初めて弟子が出来て張り切るのはいいが、君は手加減つて言葉を知らないからなあ……」

アパチャイに片手で撃がれた兼一。そんなアパチャイに笑いながら言つ秋雨。

「あは？ テカゲンつて何よ？ 日本語難しいよ！」

「ほ、本当に知らねえのかい！？」

手加減つて言葉をキッパリと知らないと言つアパチャイにツツコム兼一。

「大丈夫よ兼一、日本語詳しく無いけど、人間のぶつこわし方はアパチャイ、とつても詳しいよ！」

「大丈夫じゃねえ！？ 下手したらボク死ぬよね！？ ねえ死ぬよねえ！？」

ぎやあああと叫びながら外に連れ出される兼一。アパチャイは機嫌よく歌つていた。

「あいつにまかせて大丈夫か？」

「ほほえましいじやないか。初めての弟子で嬉しいんだろ」

頭を片手で搔きながら入つてくる逆鬼に答える秋雨。

「のりのりね」

「…………」

面白そつに笑う馬に、天井に逆さでぶら下がりながら兼一を見るしぐれ。

「ホツホツ、楽しくなりそひじや のい」

髪を撫でながら廊下に立ち、空を見上げる長老。

空は快晴、青空に白い雲。太陽が明るく梁山泊を照りし……

「あやあああああ……」

回転しながら空を飛ぶ兼一がいました。

BATTLE 15（後書き）

今回ストライ難産でした……（汗）

途中から何を書きたいのか分からなくなり、ぐけやぐけやかもしだせんが……あまり気にしないでください（苦笑）

明日から学校なので、更新が遅くなります。申し訳ありません。

BATTLE16（前書き）

待たせたな！！（スネークボイス）

忙しくて中々書けませんでした、申し訳ありません。
明日から1ヶ月、実習が始まるため、週1で更新できればいいなあ
と思っています。

もうすぐ総アクセス数30万……ビックリです（汗）

「……よし、準備完了!」

大きなリュックに服を入れた兼一。梁山泊に弟子入りした兼一は、家を出る準備をしていた。

「忘れ物は……まあ、近いから忘れた時は戻つてくれればいいか」

荷物を玄関に置き、リビングに置かれた写真立てを見つめる兼一。

「……いってきます」

写真に写っているのは幼い頃の兼一と生きていた頃の家族。

兼一はその写真にいってきますと言つた後、玄関にある荷物を持って外に出た。

いつてきますの返事は無いはずだが、不思議といつてらつしゃいと聞こえた気がした。

「今日からずつとここで修行か……頑張りつー」

梁山泊の敷地内、兼一はリュックを背負い立っていた。

「あ、兼一さん、いよいよ今日から住み込みですわね」

出迎えたのは極薄のボディースーツを身に纏い、上から白いエプロンを着けた美羽だった。

「みなさんお待ちかねですわよ！」

「あ、はーい」

兼一は美羽に連れられ、道場に行つた。

「しつれいしまーす

道場の障子を開ける兼一。そこにいたのは……

「――！」

強烈な気迫を放つ梁山泊の達人達。兼一は気迫に驚き、後ろにジャンプした。

「ふむ、いい動きだね」

「まあまあだな」

「あぱぱぱぱ

兼一の動きに感心する達人達。

「……いきなりなんですか？」

冷や汗をかきながら道場に戻る兼一。

「さて、今日よつね主を梁山泊の正式な弟子とする」

こつもの飄々とした感じから一変し、真剣な表情で言つ振る。

「いいかガキ、お前は「あのわ」……ん？ 何だ？」

逆鬼の話を遮る兼一。

「逆鬼さんできれば……名前で呼んでくれませんか？」

「おつと、わりにな……よし、兼一！ これでいいか？」

「はー、逆鬼先生！」

「せ、先生……いや～」

兼一の言葉に照れる逆鬼。

「さて、さつそく修行を始めたいが……」

「あ、岬越寺や……先生」

壁に寄りかかりながら顎に手を添えて話す秋雨。

「君がいつもどんな修行をしているかは知らないが、ここではそれ以上に辛いと思つていてくれ」

「は、はあ……」

兼一は秋雨の言葉に苦笑いをした。

「それでは……始めえ！！！」

秋雨の日が光り、
氣合いの入った声と共に修行が始まった。

「……めぐらしく……」

最初の修行……空氣椅子。両手に水の入った壺を持ち、足を口一
ブで固めて動かないようにし、お尻の下には根性と書かれた線香を
置いている。

「はい、後30分」

それをお茶を片手に持ち、くつろぎながら見てる秋雨。

な、長くないですか？」

普通だよ

た
だ
い
ま
1
時
間
経
過
…

ପ୍ରମାଣିତ ହେଲାଏବେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

「やめてえ！！！ 顔がすり減るううーー！」

次の修行……腕の筋肉トレーニング。逆立ち状態で背中に取つ手を付け、逆鬼が取つ手を持ちながら走り、兼一は腕の力だけで前に走るトレーニングだ。

ただそのスピードが速く、兼一は必死だつた。

「おひおりー！ みんなスリーで上かなーー！」

「これ以上は無理いいい！！」

「お前は腕を使つて蹴る技が多い！！だから腕力をつけねえとバランスを崩して威力がでねえ！ オレもそう思つてたぜ！！」

「お、オレもおー? はつー!」

逆鬼の言葉に違和感を感じた兼一。そして気付いた。

「あ、あんたかあ！？」

逆鬼の言つた言葉は「オレも」と言つていた。つまり、最初に言ったのは……

「さあ頑張つてえ」

秋雨だ。木に寄りかかりながら兼一に手を振る秋雨。

「……あの、岬越寺先生？」

「どうしたんだい？」

「恐ろしく嫌な予感がするんですけど、これは一体どういった修行ですか？」

「…………」

足と腕を固定され、上半身しか動かせない状態の兼一は、ロープを縛っている秋雨に質問した。

そして正面には「ゴムボールを持ったしぐれがいる。

「君は戦う際には手を使わない。だからガードをしないで攻撃を避ける練習だ」

「頑張って、避けて……ね」

兼一から10メートルほど離れたしぐれは、ゴムボールを片手に持ち、振りかぶった。

「え？……うわあっ！？」

兼一の顔の横を高速で通りすぎたゴムボール。ギリギリ上体を横に曲げて避けた兼一。

「とりあえず200個あるから全部避けるよ！」。10個当たったら最初から

「あ、鬼畜だ……つてうわあっ！ ひいっ！」

連續で来るボールを右に左に避ける。

「ファイ……ト」

「ひいっうわっ……ぶはあっ……」

「午前の部終了。昼食食べたらまた楽しい修行の始まりだよ」

「…………殺され…………る…………」

地面に横たわり、真っ白な灰になつた兼一は、口から魂を出しながら氣絶した。

「午後の修行を始めるね。午後は技の練習をするね」

「あぱばば」

「……はー」

午後の部、道場で技の修行。今日は馬による中国拳法の技と、アパチャイによるムエタイの技を教えてもらつ事になった。

「まず最初においちやんからね。兼ちゃんは足技主体だから……そ
うね、前掃腿からね」

そういうって馬は、突然しゃがんで手をつき、左足を軸に回転しながら右足で兼一の両足を刈るよつに蹴った。

「ぐえっー。」

いきなりの事で受け身が取れず、後ろへ頭から倒れる兼一。

「これが前掃腿ね。これは相手の足を刈る蹴り技ね」

馬は兼一に笑いながら説明した。

「あぱっー。次はアパチャイの番だよー。」

軽く手を上げるアパチャイ。

「ムエタイの基本、カウ・ロイドー。」

カウ・ロイドーは、飛び膝蹴りの事だ。アパチャイは両腕を頭の横に構え、空中で膝を曲げて蹴った。

「つぱりー。」

風圧で兼一の髪の毛が上に逆立つ。風圧で蹴りの威力が凄いと感じ。

「とりあえず、これを1000回ずつやるね」

「うえつー・せ、1000回ー・?」

馬がわいつと三つ回数に驚く兼一。

「まずはカウ・ロイからよー。」

アパチャイは氣合いで十分な顔でミットを構える。

「……やるしかないか」

諦めた顔で構える兼一。そのままアパチャイのように両腕を構え

……

「シッー！」

ミットに右膝を打ち込む。乾いた音が道場に響き渡る。

「あぱりー 兼一、相手が近づいたら首を取つてカウ・ロイよー。」

「はーーー シッー！」

言われた通りミットを両手で掴み、膝を打ち込む。

「はー…… 次は避けよおおーーー！」

「はーー……つて、ええーー？」

「あ、こりー アパチャイ今回は打たせるだけ……ー！」

馬の声は囁かず……

「イーヤバダバドウーツーー！」

「二十九ーー？」

叫び声と共に兼一の顔に左のマジックを叩き込んだ。

BATTLE 16（後書き）

今回は修行だけです。

独自解釈がある場面がありましたが、大丈夫でしたかね？（汗）

BATTLE17（前書き）

連続投稿！

1時間からずつに書けました！

今回はちょっとHロード……？

「もひ……だめ……」

全部の修行が終わり、梁山泊の『離れ』の自室に戻った兼一。時間は7時、外は暗くなり、三日月が辺りを照らしていた。

「ひばああ……」

ボロボロの部屋の畳に寝そべり、汚い天井を見つめる兼一。左頬が腫れたので湿布を貼り、身体中が癪だらけになっていた。

「キツいよ……師匠、貴方の修行が天国だと思つたのはこれが初めてです……」

今は亡き師匠に田尻にキラリと光る涙を溜めながら言う兼一。サムズアップされた師匠が親指を立てて笑っている光景が田に浮かんだ。

「でも、この修行を乗り越えれば……ボクは強くなれる」

ガバッと起き上がる兼一。その目には闘志がみなぎつている。

「負けてたまるかーっ！…」

気合いをいれた兼一は叫んだ。

その叫び声を部屋の前で聞く逆鬼と秋雨、そして馬。3人は兼一が逃げないように見張っていた。

「やれやれ少し元気づいた……やる気がね！」

秋雨と碁を打っていた馬は、意味ありげな笑みを浮かべながら言った。

「何です、こんな時間に？　まだ修行するんですか？」

夜の10時、白い胴着を着て、げっそりとした兼一と後ろで手を組む馬は外にいた。

「ある意味、命懸けの修行ね！」

「――」と笑いながら言つ馬。兼一はある事を思い出した。

「（やうござば、中国拳法では内弟子にしか教えない絶招といつのがあつたな……誰にも見られない様伝えられるとか……）」

絶招、これは奥の手の総称の事だ。

「ついてくるわね」

ついてくるよつぱつた馬は、裏庭の方へ歩き出した。

「梁山泊の裏庭つておそれしへいですね……都心のど真ん中によ

くもまあ……

裏庭の広さに呆れる兼一。

「かがむね」

「へつ?」

草場にかがむ馬に習い、一緒にかがむ兼一。

「あれ? 湯氣が出てる……」

遠くの方で白い湯氣が立っていた。

「あれは……温泉ね!」

「お、温泉! ?」

「しーつ、静かにね! !」

田に湯氣の正体は温泉らしい。馬は驚いて声をあげた兼一の口を手で押された。

「ずっと前にアパチャイの奴がいきなりそれを堀始めて、3日ほどで堀あてたね」

「おこおこ……」

馬の説明に思わずつむぐ兼一。

「で、それがビリして命懸けの修行……はつ……」

「フフフ、ものわかりがいいね」

ある事に気付いた兼一は、顔を赤らめた。その反応にこやかに笑みの馬。

思に浮かんだのは温泉に入っている裸の美羽とじぐれの姿。

よつせ、覗きに行こうとした事だ。

「や、早く行きましょう」

キリッとした顔をし、ほふく前進で先に行く兼一。

「もう兼ちゃんたら~む……動くな！」

「へ？」

突然の馬の制止に止まる兼一。

馬は木の枝を持つて前に探るよつて振る。すると……

「ひつ……」

枝にむかって竹の槍が突き刺さった。ビリやられのようだ、探つた先には紐が張られていた。

「じぐれどんの仕掛けた罠ね。温泉に近づくと獣にならぬ……」

「……まさに命懸けの修行ッスね、馬先生……いや、師匠……（H
ロ）」

場にそぐわないシリアルスな顔な兼一と馬。

そして、2人のミッショングが始まった。

「師匠！ 危ない！」

「！」

馬にむかって飛んでくるロープがついた竹の槍。全方向に丸く尖った竹が、馬を突き刺そうとする。

「ちょわっ！』

それをほふく前進の状態から上半身を曲げて躰した。

「……」

「兼ちゃん！」

突然姿を消す兼一。落とし穴に嵌まり、落下したよつだ。

「あ、ぶ、ねええ……！」

穴の中で必死に足と手を使いなんとか落_下を防いだ兼一。下にはまた竹の槍_が30本ほど待ち受けていた。

「師匠……これは使えますか？」

「これはいいね！」

なぜか置いてあつた2枚の段ボール。2人はそれを被り、しゃがみながら歩いた。

「なぜだろう……どこか懐かしいような……被らなければいけない使命感が……」

「兼ちゃん、早く進むね」

「じつかりするね！ もう少し！」

ピシャッと兼一の頬を叩き、気合いを入れさせる馬。

2人の間に、師弟を越えた友情のようなものが芽生えた事は、言つまでもない。

「はあつはあつ」

決死の思いで罠を掻い潜り、目的地に着いた2人。

「――！」

「むつ―！」

草場の奥からジャブッと水の音がした。

(() る――)

誰かが温泉に入っているようだ。

「あ、師匠ずるーい」

「弟子は師の後と4000年前から決まつてゐね!」

ニヤニヤといやらしい笑みで覗くとする2人。馬は兼一を蹴りながら先に覗いた。その後に続く兼一。

そして、覗き見た桃源郷の先には……！

「何じゃ2人共！ 入るなつさつと入らんかい……」

真っ裸の老人がいました。

「…………」

あまりの光景に口から魂が連續で出る兼一。

「…………」

逃げようとしたが服を掴まれる馬。

「あれ？ 長老……いつもは最初に風呂に入るのにね～

「ははは剣星！ わしがお主の、行動ばたあんを読めぬとでも思つたか！？」

温泉にいたのは長老だった。長老は2人の襟首を掴んで持ち上げ、カラカラと笑う。

「まあ2人共ゆつくりと、つかつてゆくがよい！～」

そして2人を思いきり温泉に突っ込んだ。水飛沫を上げて温泉に

に入る2人。

(師匠……無念です)

(なんの、チャンスはまたいつかくるね)

アイコンタクトで話す2人。

H口師弟の挑戦はまだまだ続く…

「まーなんだ、一度や一度の失敗であきらめではないかんといつ事じ
やな。ケンカも覗きも。」

頭にタオルを乗せて言ひ長老。

「はあ……ガンバリます……じつちを…」

裸で温泉につかる兼一。

「ふ~」

タオルで顔を拭きながら温泉につかる馬。

「……兼ちゃん、その背中のは……」

「ああ、はい。これが事故の時の傷です」

馬が兼一の背中にある傷を見つけ、兼一は背中を長老と馬に見せる。

右から左にかけて斜めに走る傷跡。深く抉れ、事故の酷さを物語つている。

「ま、男だったら誰しも傷がつくもんじや。身体にも心にも……のう」

背中を見た後、論するよつて言つ人生の先輩の長老。

「ま、そこまで気にしてませんけどね」

苦笑混じりに言つ兼一。

「……時に兼ちゃん。今度の覗きはこつこするね?」

「明日こじましょ」

馬の提案に即答する兼一。

「ほつほつ、まあ頑張りなさい」

笑いながら言つ姫君。

楽しげに話す3人を、綺麗な三田円が照らしていた。

BATTLE17（後書き）

エロくなかつたぜ！

前書きで期待してた人、残念でした（笑）

事故の時の傷を出したくて書きました。

段ボール？ははは、なんのことやら……

INTERVAL 2（前書き）

短編小説です。

この先の物語には必要な人達の登場です。

INTERVAL 2

とある建物のとある部屋。そこに1人の少女と何人かの男達がいた。

「なにい？ 筑波が？」

茶髪のショートヘア、頭に帽子を被り、左足のズボンが無く、鍛えあげられたしなやかな足を出した格好の少女。

その少女は隣にいる金髪の男の報告に笑つた。

「アハハハハ、そうかい！ 筑波の奴、白浜とかいう奴にのされたのかい！？」

少女は適度に汗をかい体でステップを踏み、回転しながらジャンプした。

周りの男から1つのコンクリートの塊が投げられる。

「 シツー！」

後ろ回し回転蹴り、勢よく放たれた蹴りは、コンクリートの塊を蹴り碎いた。

「いるじゃないか……イキのいいのがー！」

華麗に着地する少女。その動きはテコンドーをやっている人間で、碎かれた塊から蹴りの威力が分かる。

「ふうー……おい、お前らー！」

その少女が呼ぶと、後ろから3人の男が現れた。

1人は褐色な肌に金髪、長身で左手をズボンのポケットに入れている男。

1人は褐色の男よりも背が高く、がたいのいいグラサンの男。

1人は小柄で、頭にバンダナを細くして巻き、ピアスを付けた男。

「お前ら技の三人衆に命令だ。白浜という奴をここに連れてこい」

「うす……」

グラサンの男は技の三人衆、投げの宇喜田。

「分かりました」

褐色の男は技の三人衆、突きの武田。

「はい」

小柄の男は技の三人衆、ケリの古賀。

「どんな手段を使ってでも連れてくるんだ」

そう言つて少女はまたステップを踏んだ。

「キサラ様、もう一つ情報が……白浜は蹴り技の使い手らしいです」

「なにい？」

飛んできたコンクリートの塊を蹴り碎く少女……名はキサラと言

הנני

「そうかいそうかい、蹴り技の使い手ねえ……わたしの他にも蹴り技を使う奴がいたとはねえ」

「あ、あの、キサラちゃん？ ボクも蹴り技使うんだけど？」

「樂しみだねえ……」

「あ、あの？ キサツちやん？」

白浜兼一の波乱万丈な学校生活はこれからどうなつていいくのか
続く！

「キナリナギアアアアアん！？」

「今更心配...」

「アーヴィー、シーディー」

INTERVAL2（後書き）

古賀は残念な子。（笑）

総アクセス数が30万越えたwww

この作品を読んでくださっている全ての皆様に感謝を……

BATTLE18（前書き）

総アクセス数が40万近くになつてきましたよ……
読んでいただきありがとうございます。

初めて投稿してから3週間が経ちますね……早いですねえ。

春が終わり衣替えの時期、半袖の白いワイシャツを着た兼一は、学校内を歩いていた。

「ひつー。」

「うわー。」

「こわー。」

兼一の周りにいる生徒達は、兼一が通りすぎるとかくと離れたり、ひそひそ話をしていた。

「……はて？」

周りの反応に疑問に思い、ベンチの前で考える兼一。

「ボク、何かしたっけ？」

周りの反応は兼一を怖がっているようだった。

「よつ、どうなさいたんですねの？ ホッ。」

「わつー。」

兼一の後ろにある木の枝に飛び乗り、1回転してから着地する美羽。

「美羽さん……また近道ですか？　いや、それがですね……」

「号外～号外～」

「ほえっ？」

遠くから誰かの声がし、2人は声がした方向を見た。

「あの白浜兼一が、なんと空手部で1番の悪一・筑波を倒しちゃつたよーっ！　さあ大変な事になつた！　あ、持つてつてください！」

その先には右肩に白浜白星！　相手は筑波……と、書かれたたすきをかけ、左肩には大量の紙の束が入った鞄をかけた男。

「こ、新島あ！？」

宇宙人のような男、新島だ。配つている紙には兼一が筑波を倒したという内容が書かれていた。

「白浜は実はかなり凶ぼつ」「ちえすとおおー」「ぶつー」

新島を止めるように走り出した兼一は、新島の頬に飛び蹴りをした。

「……」

「う、うわあ白浜だ！　本当に凶暴だったのか！？」

「あやー。」

兼一の行動に逃げ惑つ生徒達。パタッと氣絶する新島。

「どうこいつもつだああ新島ああ！？」

氣絶している新島の首もとを掴み、ガクガクと前後に揺らす兼一。

「えい……」

「ハツ！」

新島の両肩を押された美羽は手に力を込めた。すると新島は氣を取り戻した。

「やあ、これはこれは……ボクの親友の兼一君……」

「誰が親友だ！ これは何のまねだ！？ 説明してもうひつか！？

むりりとした動きにへへへと笑いながら手をする新島。そんな新島に怒鳴る兼一。

「オレ、新聞部だしこいつ。親友の出世と聞こいや、黙つていられないじやん……照れんなよ」

「照れてな～い！！」

兼一はポンと肩を叩く新島を怒鳴り付ける。

「んー？ 隠れろ兼一……」

「うわっ……」

肩を掴んだまま後ろに兼一を隠す新島。すると、3人の男が歩いてきた。

「ふん！ 筑波のまぬけめ……ラグナレクのいい面汚しだ……」

1人の男が、新島が配っていた紙を見た後ハラリと紙から手を離し……

「……」

高速で放たれた右手の拳が、乾いた音をたてて破れた。

突きの武田一基。

「筑波をしめるー。2度と学校には顔を出さずな」

「つか」

白いワイシャツにグラサンの男。

投げの宇喜田。

「あいよー。」

小柄で、頭にバンダナを細くして巻いている男。

ケリの古賀。

技の3人衆はバラバラに歩き、その場から離れた。

「……もつこいぞ」

「今の誰？」

3人がいなくなつた後、兼一は新島の影から顔を出した。

「ありやラグナレクの連中だ」

「ラグナレク……どつかで聞いたような」

ラグナレクというグループに聞き覚えがある兼一。

「こ」の辺りを牛耳る強力な不良グループだ！ さあ大変だぞ兼一、
お前は目立ちすぎたからな……いずれ待ち伏せもあるかもしれない
ぜ」

「やにやと不気味な笑みを浮かべながら脅す新島。

「お友達になりたいだけかもしれませんわよ？」

「いや、ねえよ」

「はうー。」

美羽の天然発言に新島と兼一は同時につっこんだ。

(それでも、面倒な事になつてきたな……)

「と、いう訳で何か対処法はありませんか？」

場所は変わつて梁山泊の道場。カコーンと高い音をたてるししおどしが鳴り響いていた。

道場には梁山泊の達人が全員集合していた。兼一は正座しながら長老に相談する。

「そうか、それは大変な事になつたのう……では一つ、わしが良い作戦を教えよ。」

髭を撫でながら言つた長老。それを息を飲みながら真剣に聞く兼一。

「作戦……ですか……」

「名付けて！」

戦つて戦つて、戦い抜いたら最後に立つていたのはボクだった！

「作戦じゃ！」

あまりにもぶつ飛んだ作戦にこける兼一。

「なんだそりゃ―――?」

「類似品に、逃げて逃げて逃げ抜いたのに最後は結局捕まつた作戦つていつのが……」

「 もひいわー。」

ケロッとして畠の長老に呆れる兼一。頭が痛くなり、ため息をついた。

「くくく……戦いつてのは始めちまつたら、途中じゅややめらうねーつてことよー。」

「そゆことねー。」

話を聞いていた逆鬼と馬は、便乗するよつと言つた。

「しかし、敵が組織だつてきた以上、大急ぎで多対一の戦法を教えねば……」

「敵は武器も……使つてくの……」

今後の修行方針を決める秋雨、ボソリと畠のじぐれ。

「はあ……他人事だと思つて……」

「まあ、なんじゅ。お主は戦う道を血ひり選んだ者じゃりつへ。」

「……はー」

「だつたら……覚悟決めちまえよ……。」

兼一の背中を押すようにニシと笑いながら言つた。

「……はーー」

兼一はその言葉に返事をした。

「でも……ずっと戦いばかりだと大変ですよ……休む暇があるのかなあ？」

兼一は覚悟を決めたものの、これから戦いの日々に思わずため息をついた。

「ふむ、いいで良いくて話を聞かせてやるわ」

兼一の言葉を聞き、長老はとある話を始めた。

「ある武術家のお話じゃ……その者は若氣の至りから、つこいつひとつと……」

500人の達人を半殺しにしてしまつてのう……！

一度戦つちまつと、やりたくないくとも次々と喧嘩を売られちま

「つもんじゅなよ……

だから仕方なく道場破りに明け暮れた……だが、ある日氣がつくとその者は……！」

「じじいになつとつたんじゅよ

「だああああー！？」

長老の話のオチにさすがに付る兼一。

「グッハッハッハッハッ！…」

「こりゃ一本とられたねー！」

「いつもながら奥が深い……」

「アパパパ？」

「……」

ある者は笑つたり、ある者は感心したつと色々な反応を見せる達人達。

「結局一生戦えつてのかー……」

「まあ、これはお話じゅかりの、実際にはほとんどの者が途中で死ぬ……」

「おじい様ー もう向こうへ行つたよー……」

長老を止める美羽の叫びが梁山泊に響いた。

BATTLE 18（後書き）

早く出したいキャラがいつぱいにすきで困る……

とりあえず、キサラと谷本の出るシーンはもつ頭の中で決まっています。

原作とは違う展開にしていきたいと思っています。

最後に……ギャグのセンスが欲しい……切実に……

誰かネタ下さい！（笑）

BATTLE19（前書き）

総アクセス数40万突破！

総合評価2000pt突破！

感謝感激でございます！これからも頑張りますので、応援して頂けると幸いです。

BATTLE19

ここは梁山泊。武術を極めた者の集つ場所……
そんな梁山泊に1人の少年が……

「ぐわあああああ！ もうだめえええ！」

死にかけていた……

「あと40分♪」

死にかけている少年の名は白浜兼一。

兼一はハムスターが使う回し車を人用サイズの大きさにした物の中に入り、両手両足を使ってガラガラと回していた。

「死ぬうううう！」

「死ぬと言えるならまだまだ大丈夫だよ」

ただその回転スピードはまさに高速。

少しでも気を抜けば転んで回し車の回転に巻き込まれるだろう。

「あ、あと何分――！？」

「あと45分♪」

「増えてるわあああ――！」

「…………」

「はい、お疲れ様。次は技の練習だよ」

回し車の修行が終わり、力尽きている兼一に容赦ない言葉をかける男。

梁山泊の達人の一人、岬越寺秋雨。

「次はオレの時間だ。今回教えるのは上段蹴りの基本だ」

そう言って現れた男。空手の達人、逆鬼至緒。

「空手の蹴りはな、まず蹴り脚の膝を抱え込む」

逆鬼は右足をゆっくりと上げ、膝を抱え込むよついで曲げた。

「これは膝が開いていると軌道が読みやすいからだ。こうして膝を曲げれば、蹴りの可動範囲が広がり、当たる確率が上がる」

ビュンと空気を切る音をたてながら上段蹴りを放った。

「これをマスターすれば上段、中段、下段の蹴りが簡単に出来るようになる」

そのまま中段、下段の蹴りを放つ逆鬼。蹴るたびに空気を切る音

をたてる。

「あとな、ムエタイの蹴りと空手の蹴りは少し違う。アパチャイ！」

「あぱー！」

逆鬼に呼ばれた男。ムエタイの達人、アパチャイ・ホパチャイ。アパチャイは右のハイキックをサンドバッグに打ち込んだ。蹴りの威力で縦にぶつ飛ぶサンドバッグ。

「ムエタイのハイキックは、まっすぐに最短距離で蹴ってる。だから、蹴りの打ち合いならムエタイの方が速い」

逆鬼は両手を組み、兼一の方を見る。

「だからお前は、場面に応じて空手の蹴りとムエタイの蹴りを使い分ける……って、起きろ！」

「げふつー！」

ずっと力尽きていた兼一は、逆鬼の説明を一切聞いていなかつた。それに気づいた逆鬼は、拳骨で兼一を起こした。

「これで技の修行は終わりだね。そろそろ夕食だから、着替えてくれよ」

「…………」

時間は夜の7時、1日の修行を終えた兼一は、ピクピクと口から魂を出しながら畳の上に寝そべっていた。

「し、死ぬ……」

「そういえば兼ちゃん、最近夜のバイトの呼び出しが無いね」

死にかけている兼一に話しかける男。中国拳法の達人、馬剣星。

「夜のバイト……ああ、護り屋ですか？あれならもう辞めました。流石に修行の後には無理そうだったので……」

護り屋……これは兼一が昔からやっていた用心棒のような仕事だ。喫茶店の仕事をと一緒にしていたが、兼一はもう辞めたようだ。

「ほつ、いつ辞めたね？」

「昨日のバイトの時に……意外とすんなり辞めさせてくれました」

「あん？ 喫茶店の方もか？」

話に入ってくる逆鬼。手にはビールの瓶を持っていた。

「いえ、喫茶店の方は辞めないで欲しいと言わされたので……」

「…………」

立ち上がり、苦笑しながら言つ兼一。

「まあ、確かに用心棒やりながら修行はキツいわな

「ならもひとつ修行に力を入れてよさそうね！」

「しまつた！ や、藪蛇だ！？」

護り屋のバイトを辞めたと知り、今後の修行を厳しくされる兼一
兼一はこれからどうなつてしまつことやら……

「ふああ……眠い」

次の日の朝、今日は水曜日。
天気は快晴の暑い夏日だ。

「ふふ……まだ修行に慣れませんですか？」

一緒に登校しているのは梁山泊に住む長老の孫、風林寺美羽だ。
美羽はクスクスと笑いながら兼一の隣を歩いていた。

「……あれを慣れる日が来るのでしょうか？」

「あははは……」

どんよりとして答える兼一に先程の笑みとは裏腹な苦笑いを浮かべる美羽。

「あ、そつだ美羽さん！ ボク今日はバイトあるんで先に帰りますね」

「分かりましたわ！ 頑張ってくださいね」

美羽はニコリと笑い、兼一を応援した。

「あー、白浜君、おはよー！」

教室に入り、席に座った兼一に挨拶をする少女。

「ああ、泉さん。おはよう」

少女の名は泉優香。兼一のクラスメイトだ。

「あ、あのを白浜君！ 少し聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」

「いいけど……何かな？」

「あ、あのね！　その……」

もじもじしながら顔を赤らめている泉。

「……今度の休みに……映画「席に座れ～！」……」

泉の話を遮るように入ってくる担任の安永。キラリと光る頭に前列の生徒が眩しそうに目を瞑つた。

「ん？　なんだ泉。早く座らんか」

「…………はい」

恨めしそうに見る泉に注意する安永。注意された泉はとほとほと自分の席に戻つていった。

「一体なんだつたんだろう？」

兼一は途中だつた話に疑問に思つていたが、朝のホームルームが始まつて、アクビをしながら参加した。

「お、おい！　白浜！」

「ん？　どうしたの？　姫野さん

ホームルームが終わり、次の授業の準備をしていた兼一に話しかける少女。名を姫野。

「あ、あのセー！ 白浜はいつも飯御飯どうしてるんだ？」

「自分で作ってるよ」

「や、そりなんだ！ な、ならセー！ わ、私が作ってあげようか？」

「……え？」

「い、いや、べ、別にいらないならいいんだけどセー！ ただ自分で作ると料理が余るからセー！ 捨てるのももったいないし、かと言つて自分で食べるこはめざせるからセー！」

「は、はあ……」

喋り出した姫野の話は止まらない。それに少し圧倒される兼一。

「余った料理をお弁当箱にいれたら一つ分になるからセー、だから誰かにあげようかなと思つてたんだけど、そこで白浜にあげようと思つてセー！ いや、別に白浜に作らうとした訳じゃないよ！ ただの気まぐれみたいなもんで、深い意味は無いんだ！ だから……」

「……」

頬を赤くし、そっぽを向いて話す姫野。だんだん話が逸れていき、もはや独り言のようになつっていた。

どう反応していいか分からず、困る兼一。

「おい、白浜。次は体育だから早く行こうぜ！」

そこにクラスメイトの男子からの助け船。

「あ、うん分かった！ えっと、姫野さん？」

「べ、別に好きと言つ訳じゃないんだ！ ただし気になるつてい
うか、他の男子とはちよつと……いや、かなり違うから……それに
顔も悪くないし、強いし、助けてくれたし……だからちよつとい
なあつて……で、でも勘違いしないでよね！ それとこれとは別な
んだから……そもそも……」

「えつと……や、先に行くな？」

ボソボソと独り言を言い、自分の世界に入っている姫野。途中か
ら何を言つているのか聞こえなくなっていた。

そんな姫野に一言かけた兼一は、体操着を持つて教室から出た。

「そ、そんな訳で！ 明日から白浜に弁当を作つて……つてあれ？」

「…………え？」

自分の世界から帰ってきた姫野が兼一に話しかけるが、もう教室
には姫野と泉しかいなかつた。

BATTLE 19（後書き）

とつあえず出番が少ない2人を出したかった回です。

姫野はシンデレ的な感じにします。異論は認めない。

空手、ムエタイの蹴りについては昔読んだ漫画と調べた資料を参考にしています。

作者は武道は剣道とほんの少しの柔道をしていただぐらいですでので、合っているかは分かりません。

なのでこじは異論を認めます。

BATTLE20（前書き）

20話ですー。ついでにここまで来た……

もうすぐ投稿してから1ヶ月経ちます。早いもんですねえ……

「はあ……」

学校の帰り道、バイトにむかつ途中だつた兼一は、今の現状にため息をついた。

「……なんで」

思わず空を見上げる兼一。夕方の空はオレンジ色に染まり、カラスが数羽飛んでいた。

「……どうして」

現実逃避を止め、辺りを見渡した。

ここはとあるバイト先の近道、何もない空き地だ。

そこに兼一と……

「よそ見なんて余裕だね！」

「てめえ！ シカトしてんじゃねえぞー！」

「古賀さん！ こいつ、ぶっ殺しましょー！」

兼一を取り囲む9人の男達。

手には鉄パイプや木刀等武器を持っている。

「いわなるの……」

田頭を押さえてため息をまた1つ。

1時間前。

「やつと終わったあああ……」

最後の授業が終わり、放課後のチャイムが鳴る。

授業が終わった生徒は、帰宅の準備をしたり、部活に行こうとしたりとガヤガヤと騒がしくしていた。

「さて……バイトに行きますか」

ショルダーバッグを肩にかけ、美羽の席に行く兼一。

「あ、美羽さん！」

「兼一さん！ もう行きますの？」

「はい！ 美羽さんは部活ですか？」

「そうですねよ」

美羽に話しかける兼一。美羽は鞄に筆箱を入れていた。

「頑張つてください」

「兼一さんも！」

そしてお互に笑いあつた。

「やつぱつあの2人つて……」

「うう……勝てる氣しないよお……」

そんな2人を遠目からひそひそ話をしながら見ている姫野と泉がいた……

「ああ……少しでも修行から逃れられる……まあ、帰つたら基礎トレーニングが待つてるけど……」

学校を出て、バイト先に向かう兼一。背中に暗い影を背負いながらとぼとぼ歩いていた。

「後30分くらいか……近道してこいつ

腕時計を見て時間を確認すると、バイトが始まるまで後30分だった。

急がないとマズイと思った兼一は裏路地に入り、狭い道を歩いて空き地に出た。

「……あ

そこに待ち受けていたのは……

「ボクつて本当に運がいいんだな～こんな所でばったり会えるなんてね！」

小柄な身長、頭にバンダナを細くして巻き、右耳にピアスを付けた男がいた。

「ボク、古賀太一！ ちょーっと付き合ってくれるかな白浜兼一君

男の名は古賀太一。ラグナレクの技の3人衆の1人だ。

「武田さんが連れてくれるようになつてうるさくて……」

その言葉をきつかけにどこからか現れた男達は兼一を取り囲んだ。

「……はあ

そして話の冒頭に戻る……

「4、5、6……9人か。そのうち武器持ちが3人、素手が6人……」

「……」

周りを見渡して人数の確認をする。

武器持ちは3人、木刀と鉄パイプとチエーン。
素手は6人、内メリケンを付けているのが1人、古賀太一も素手だ。

「もしかして怖じ氣ついたの？」

古賀が言つた言葉に周りの男達が笑う。

「はあ……時間無いつてのに……」

腕時計を見れば残りは25分。ここからバイト先まで10分だから、実質15分しかない。

「よーし、囮みをせばめろ！ 武田さんには、ズダボロになつた君を届けるよ」

「へへへ……」

「ぶつ殺してやるぜ……」

笑いながら指示を出す古賀の言つ通りにじつじつと兼一に近づく男達。

「……そういえば、さつき君、運がいいつて言つてたよね？」

「……？ 確かに言つたけど？」

突然質問する兼一に疑問に思ひながらも答える古賀。

その答えにニヤリと不敵に笑いながらポケットに手を入れ、手袋を手にする兼一。

「どうちかと並ぶと……」

両手に手袋をはめ、右の爪先で地面を軽くトントンと蹴った。そして……

「運が悪いと思つよ?」

不敵な笑みで挑発する兼一にキレた男達が、一斉に殴りかかってきた。

「てめえ！　なめてんじゃねえ！」

素手の男が右の拳を兼一に振りかざすが……

「遅いよ……シツー！」

「ぶべえつー？」

上体を後ろに反らして躰し、右の爪先で顎を蹴り抜いた。

「一人目……シツー！」

「二番目……！」

上にあげた右足を戾しながら後ろに蹴り抜いた。

兼一の後ろ蹴りは、後ろから鉄パイプで殴ろうとしていた男の腹にめり込み、男は勢いよく吹っ飛んでいった。

「2人目……おつと」

「ちつ……」

正面からチョーンを横に振るった男の攻撃を頭を下げて躱す。チョーンの男は舌打ちをし、2回、3回とチョーンを振り回した。

「おつと……ほつ……よじしょ」

「い、いの……ちよこまかと………」

軽く躱す兼一。悉く躱される攻撃に苛立ってきた男は、思い切りチョーンを振りかぶった。

「おらああ！　あ、あれ？　消え……」

「足元がお留守だ！」

「う、うあつ！？」

横に振るったチョーンは空を切り、兼一を見失う男。

兼一はチョーンをしゃがみながら躱し、男の足を刈るよじに蹴った。

前掃腿……中国拳法の技だ。

足を刈られた男はバランスを崩し、後ろに倒れそうになつた。

「ふつ……肩肉シュー^{エボール}トー！」

「があつ……かはつ」

そこを兼一は、すぐに立ち上がりて右足を高く上げ、踵落としを男の肩に降り下ろし、背中から地面に叩きつけた。

「3人目ー！」

「「」の野郎！ 死ねえ！！」

「切肉^{スライス}シュー^トト！」

木刀を振るう男に左足を振るう兼一。兼一の左足は木刀を捉え、空高く回転しながら吹っ飛ぶ木刀。

「あ、あれ？……ぶへつー？」

呆けている男に容赦なく蹴る兼一。

「4人目！ ふつ！」

兼一は逆立ちになり、手を交差した。

「つひあつー！」

「がつー！」

「ぶつー。」

「ぶはつー。」

「ぐえつー。」

手を支点に足を開脚し、回転しながら連續で蹴る兼一。足は男達の顔や腹に当たり、蹴られた男達は気絶した。

「これで……8人。後は君だけだね」

立ち上がった兼一は、1人残った古賀を見る。

「あはは……やつぱり君、強いなあ……でも、ボクの方が強いよー。」

「御託はいいから早く来なつて」

「い、このお……ー」

兼一の挑発に乗った古賀は、走りながら兼一に飛び蹴りをした。

「ボクはケリの古賀太ーー！ 聞いた事な……ぶへえー！？」

言葉の途中で蹴られる古賀。飛び蹴りの最中に兼一の右足が左頬を捉え、きりもみしながら地面に叩きつけられた。

「だから、御託はいって言つたでしょ？」

フーッと息を吐き、ポケットから飴を取り出して口に食わえ、手

袋をとつた。

「やばい……早くしないと遅れる!」

腕時計を見るともう10分しかない。
焦った兼一は、走ってバイト先に向かつた。

……余談だが、この後古賀はキサラに右頬を蹴られていた。

BATTLE20（後書き）

古賀は残念な子。異論は認めない。

兼一無双回です。そこら辺の不良には楽勝で勝ちます。
なんかチートっぽくなっていますが、今だけです。

今後負けたり、ボロボロになつたりと戦いは激化していきます。

BATTLE 21 (前書き)

遅くなりました……申し訳ありません。

実習もやっと終わり、少しずつですが時間が空きました。
これからまた更新再開しようと思します！

応援よろしくお願い致します……

BATTLE 21

「おせえーー！」

「へふつー。」

「こは梁山泊の道場。そこで兼一と逆鬼は組手をしていた。

「蹴りのタイミングが遅い！ もうと確実に蹴れ！」

「は、はいーー！」

兼一の蹴りは逆鬼に当たる「こなく空を切り、逆鬼の手加減した突きが入る。

「ちつ……ちつともうまくならねーなー」

舌打ちをし、頭をガシガシと搔く逆鬼。

「サンドバッグ蹴り1000回やつてろー！」

「…………は、はこ……」

ボロボロな兼一は、逆鬼の指示通りサンドバッグを蹴りにいった。

「ぐつ……はつ……」

次の修行、基礎トレーニング。外に出て2本の杭に掘まり、逆立ちをしながら腕立て伏せをする兼一。

汗が滴り、地面を濡らす。回数は200回を越え、腕が悲鳴をあげる。

「もつと腕を下げて！ 足を伸ばす！」

「は……いつ……一 うわっ！？」

秋雨の指示に従うが、バランスを崩し背中から倒れる兼一。

「224回……中々230回越えないねえ……まあ、ゆっくり頑張りたまえ」

「くつ……せんぜん進歩しない……な

ぜえぜえと息を荒げ、地面に寝ながら言つ兼一。そんな兼一に近付く1人の男。

「そんな事はないよ、アパチャイは思つよ。」

現れたのはアパチャイ。「口ニ口と笑いながら来たアパチャイは、
兼一を慰める……が。

「でたああああああああああああああ……！」

兼一はトラウマが再発し、恐怖で叫んだ。

「ああああああああああああ！」

その恐怖に反応し、同じ様に叫ぶアパチャイ。タンクトップは筋肉により裂け、上半身裸になつた。

「来るなあああ！」

「あぱぱぱぱあああ！」

どこからか現れた石の地蔵をアパチャイに投げる兼一。投げ込まれる地蔵を蹴り、肘、突きで壊すアパチャイ。

「な、なにねあれ？」

「兼一君の恐怖がアパチャイの野生に火をつけたのだひつ……たぶん」

馬の質問に答える秋雨。私の投げられ地蔵が……と言いながらも止める事はしないようだ。

「まあ、あれはあれでよい修行だよ。アパチャイの多彩な技を肌で感じ取れる」

「なるほど、見ることもまた修行ね」

と、どこかずれた考え方をする2人。その間も兼一とアパチャイの修行(?)は続いている。

「あ、あっちいけええ！！」

次の日、学校の放課後を告げる鐘が鳴り響いた。

「だめだ……最近、まるで進歩がない……」

机に突っ伏し、落ち込む兼一。

「やうやく落とす」とないですわ、兼一さん、よく頑張ってますも
の」

その後ろで兼一を慰める美羽。

「気休めですか？」

「……はい」

正直者な美羽は、嘘をつけずに正直に答えた。

「……ちょっと散歩してきます」

兼一は立ち上がり、トボトボと歩き出した。

「……はあ……」

ため息をつきながら歩く兼一。周りは部活をしてくる生徒や帰宅する生徒で賑わっていた。

「……こんなんで、ボクは強くなつてゐるのかな?」

考えれば考えるほど氣持がまじんどん暗くなつてこへ。

「はあ……ん?」

ため息をつき、曲がり角を曲がつた。すると、やこひこ……

「よう白浜君、久しぶりだね」

胴着を着た筋肉隆々な男、大門寺がいた。

「……たしか大門寺君だつけ? ボクになんかよつ?..」

「この間の礼をしにきたんだよ……勝ち逃げされちゃ俺が困るだよ」

右側だけを脱ぎ、鍛え上げた右腕を見せる大門寺。

「どうだ? あれから鍛え上げたこの筋肉は……おめえみたいなモヤシ野郎に負ける気はしねえ」

「うわあ……」

ムンツと言いながらポーズを決める大門寺にドン引きな兼一。

「おめえに勝てば、ラグナレクに入れてもうれるんだよ……だから」

空手の構えをとる大門寺。1歩踏み出し、腰を回転させ……

「死ねやあああ……！」

右腕を振るつた。

「――！」

咄嗟に構える兼一だが、ある事に気付いた。

(なんだ……スローモーションみたいだ)

ユルユルとゆっくりに見える右の正拳突き。ギリギリを見極め、ほんの少し右に首を傾げる。

「なあつーー？」

躊躇され、驚く大門寺。右腕が伸びきる頃には、兼一は大門寺の左側に立つていた。

「ていつーー！」

すかさず左足を大門寺の腹に打ち込んだ。

「『ひつー？』は……」

鈍い音が鳴り、その場で崩れ落ちる大門寺。その光景を見て、兼一は呆然としていた。

「蹴りの威力が前より大違ひだ……」

以前は三級挽き肉トロワジエムヨウガシセから粗碎ハラフクでようやく沈んだ大門寺が、1撃で倒れた。

「そつか……なるほど、少しずつだけどボクは……」

倒れている大門寺を無視し、歩き出した兼一は、右手の拳をギュッと握りしめる。

「確實に、進歩している……！」

自身の成長を感じ、笑顔で軽くガツツポーズをした。

BATTLE21（後書き）

短くてすみません…… 今回は繋ぎのお話でした。

新しくポケモンの小説書き始めました。一応ギャグもので、息抜き程度の作品です……

不定期更新ですが、そちらも読んでいただければ幸いです……

それでは～ノシ

INTERVAL 3 (前書き)

いつのまにか50万アクセス突破してたよ……

感謝を込めて書きました。

それでは、どうぞ！

「白浜兼一のね～」

「お料理教室う～」

(某キューピットで3分な料理番組のテーマソング)

「はい、始まりました！ 第1回白浜兼一のお料理教室です」

「」の料理教室は本編とは全然関係ないお話、ぶっちゃけ50万アクセス突破記念作品です！なので飛ばしてくれても構いません！」

「料理は実際に作者が作る料理のレシピです。しかも作者は素人です。なのでつっこみどころ満載だと思いますが、まあ、細かいことは気にすんな」

「さて、そろそろ始めましょうか！あ、紹介が遅れました。ボクは本編主人公、てか原作とかけ離れすぎてもはやオリジナルじゃね？」
「白浜兼一です！」

「今日のレシピは……」

《ボンゴレ・ビアンコ》

「 です！」

ワーワーパチパチ

「ボンゴレ・ビアンコはパスタ料理で、アサリを使います」

「それでは材料の」紹介！」

《材料》

- アサリ（適当）
- パスタ（適当）
- 白ワイン（適当）
- オリーブオイル（適当）
- ニンニク（適当）
- 赤唐辛子（適当）
- ブラックペッパー（適当）

「 です！」

「……え？ 適当が多い？だから細かいことは気にすんな とい
うか作者は素人と言つたでしょ？」

「男の料理なんてこんなもんです……あ、でも本編のボクはプロ並
みの腕とこう設定です。本編との話は一切関係ありませんのであ
しかりや」

「ではでは始めましょー!」

エプロン装着。柄は黒で真ん中にサングラスをかけ、頬に傷がある可愛いウサギが、ガンつけながらしゃがんでいるものだ。

『漢なら誰かのために強くなれ』
と、ウサギの右に無駄に達筆な字で書かれている。

「準備完了! まずはアサリですが、2、30分ほど塩水につけ、砂抜きをします」

ボウルに水を入れ、塩を入れる。ざるに入れたアサリをボウルに入れる。

「大体海水に近いよ、ということですが、まあ適当に入れときましょー」

「そして冷蔵庫に保存。2、30分待ちましょー」

冷蔵庫を開け、ボウルを入れる。

「いいに2、30分たつたアサリを用意します。え? お約束? ぼく、よくわからぬ」

キッチンの下からボウルを取り出す。カメラの死角なので下が見えない。

水を捨て、ざるの中のアサリを流水でガチャガチャと洗う。

「流水でアサリを洗います。次にフライパンを準備します」

ガスコンロの上にフライパンと底が深い鍋がある。

「ついでにパスタも準備します。鍋に入れ、沸騰させます。
沸騰したら塩を一杯入れます」

「さて、平行してアサリを調理します」

「まず火をつけ、フライパンを熱します」

フライパンから白い煙が出る。

「白い煙が出始めたらオリーブオイルを適量に入れる。そしてニンニク、赤唐辛子を入れます」

「ちなみにニンニクは1欠片をみじん切り、赤唐辛子は輪切りにします」

「フライパンを手前の方に斜めにし、オリーブオイルを端にため、そこにニンニクと赤唐辛子を入れる。」

「オリーブオイルに香り付けするために、フライパンを斜めにします。そこにニンニクと赤唐辛子を入れます」

「フライパンを斜めにする理由は、広がっていると全体に香り付けがしづらいからだと思います」 合ってるか分からん……

「さて、ニンニクが狐色になつたら焦げる前に取り出します」

フライパンからニンニクを取り出す。

「辛いのが嫌な人は一緒に赤唐辛子も取り出してください。今回は入れたままにします」

「アサリを入れます」

からからと音をたてながらフライパンにアサリを入れる。

「軽く馴染ませるようにし、白ワインを入れます」

白ワインをひとつ入れる。そして蓋を閉める。

「白ワインで酒蒸しにします。ボンゴレ・ビアンコのビアンコは白ワインの事で、赤ワインを入れるとロッシオになります」

火を中火にする。隣の底の深い鍋の水がグツグツと沸騰してきた。

「パスタ用の鍋が沸騰してきたので、パスタを入れます」

パスタ同士がくつつかないよう広げるようにパスタを入れる。

「今回使うパスタは8分茹でるタイプなので、1分早い7分で取り出します」

タイマーを7分にセットし、スタート。

「さてさて、そういう感じにアサリがいい感じになつてきましたね」

フライパンの蓋をとると、ブワッと湯気が出た。アサリは殻が開き、身が顔を出している。

「火を止めてアサリを取り出します。オリーブオイルのソースはフライパンに残してください」

「アサリはこのまま食べても美味しいですよ」

「そろそろパスタが茹で上がりそうですね。パスタはたまに軽く1周かき混せてください」

タイマーが鳴った。

「7分たつたのでパスタを取り出します。ザルにパスタを入れ、少しオリーブオイルを入れます」

「オリーブオイルを入れる理由は、くついたパスタを離れるようにするためです」

「ザルにパスタを入れ、オリーブオイルを1かけし、パスタをかき混ぜる。そしてフライパンに火をかける。

「ソースが少し温まつたらパスタを入れます。軽く和え、パスタの茹で汁を少しあげます」

「いい具合に和えたらアサリを入れます。あまり炒めすぎるとパスタが固くなるので注意してください」

「アサリもかき混ぜすぎると身が取れたり、殻がかけたりするので

軽くにしましょ!」

弱火でパスタとアサリを炒め、少しブラックペッパーを振りかける。そして火を止め、皿に盛り付ける。

「あとはパスタを盛り付け……出来た!」

「ボンゴレ・ビアンコの完成です!」

「ワーワーパチパチ!」

「お好みでパセリを散らしてもいいですね~」

「さて、お別れの時間が来ました。今回のボンゴレ・ビアンコはいかがでしたか? この料理は作者が初めて作ったパスタ料理だったりします」

「皆さんも試しに作つてみてはいかがでしょうか? このレシピで合つてるかは分かりませんので、自分で調べるなり本を読むなりし

「へぐだれこ……」

「それでせめた金こましうー。 もういなー」

（某キャラペラードの女（エトロ））

INTERVAL 3 (後書き)

ボンゴレ・ビアンコの作り方は本当に合っているかは分かりません（汗）

作者は料理初心者で、最近始めたばかりです。
なにかいいレシピがあれば教えてください！

ではでは～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8788s/>

戦うコックさんの弟子ケンイチ

2011年6月21日19時10分発行